2018 7

JAPAN APIC

No.007

Since 1975

JAPAN APIC No.7

CONTENTS

01 ごあいさつ

太平洋事業

太平洋諸国リーダー招聘計画
03 **ミクロネシア学の泰斗 ヘーゼル神父を招待**

07 JICA 地球ひろば ミクロネシア写真展「南洋の光」

太平洋諸国リーダー招聘計画
09 **フィジー共和国から ヨゲシュ・カラン首相府次官を招待**

11 ミクロネシア短期大学（COM-FSM）と連携強化

12 太平洋環境セミナー 2018

太平洋・カリブ事業

13 太平洋・カリブ学生招待計画 2018

17 **「ハイチ便り」**
寄稿：在ハイチ日本国大使　八田 善明　氏

ザビエル留学生奨学金

20 第 5 期ザビエル留学生　2 名決定

若い世代の育成

21 APIC にてインターンシップを体験
～上智大学グローバルインターンシップ～

22 佐原体験の「これまで」と「これから」

APIC 役員に聞く

インタビュー
23 味の素株式会社　社外監査役
村上　洋　APIC 理事

ナンマトル遺跡保存計画

シリーズ第３回
27 **ミクロネシアの巨石文化**
―世界文化遺産ナンマトル遺跡を中心に―
上智大学客員教授　片岡 修　氏

講演会事業

31 第 10 回 APIC 国際協力懇話会

32 APIC 早朝国際情勢講演会

33 平成 30 年度事業計画／収支予算

34 APIC 役員名簿／ご寄附のお願い

今号の表紙写真

マーシャル諸島エネコ島
撮影者：フロイド・K・タケウチ
Photo Courtesy Floyd K. Takeuchi / Waka Photos

ごあいさつ

一般財団法人 国際協力推進協会
理事長
佐藤 嘉恭

三月下旬、ミクロネシア連邦（ＦＳＭ）を訪問してまいりました。２０１４年３月以来でしたが、この４年の間に立ち上がった同国との数々の友好促進事業を評価しつつ、今後の一層の促進につき同連邦政府の要路者、有識者と相互理解を深める旅でありました。ＡＰＩＣのこれまでの事業につき一様に高い評価を頂いていることを知り、改めて大変勇気づけられました。

今回次世代へ向けてのいくつかの人材育成企画が立ち上げられ、堀江良一駐ＦＳＭ日本国大使のご好意で合意文書の署名式などが大使公邸において取り行われました。その席には、ジョージ副大統領、ウルセマル連邦議員（元大統領）、ピーターソン・ポンペイ州知事、ミクロネシア連邦国立短期大学関係者などの御同席があり、ＡＰＩＣの事業に対する熱い視線を感じました。同行頂いた畔道上智大学長、加藤、ハワード・テンプル大学（日本）両副学長なども同様な印象を持たれたと思います。

チューク州では、ザビエル高校を訪問しました。全校生徒が講堂に集まり大歓迎を受けましたが、その席で本年秋に上智大学への留学が決定していた二人の生徒が紹介されました。会場に響く拍手は彼らの喜びと誇り訴えているように感じました。カール校長の挨拶は日本への留学制度が定着したことにより生徒の勉学に対するモチベイションが高まっていることを示唆されていました。

帰途立ち寄ったグアムでは、ミクロネシア地域につき造詣の深いヘーゼル神父と懇談しました。１９６０年代からこの地域とかかわってこられた研究者でもあり、長くザビエル高校校長も務められたこともあるイエズス会師です。５月にＡＰＩＣの招聘で訪日され、その際の上智大学に於ける講義は本会報に詳しく報じられていますので、是非ご一読下さい。日本にとって大変大切な国々であるミクロネシア地域に対し、日本はもっと積極的に向かいあわなくてよいのかとのお考えが熱烈に訴えられています。傾聴に値すると思います。

2017 年 12 月～ 2018 年 5 月の APIC の主な動き

12 月 14 日	JICA 地球ひろばにてミクロネシア写真展「南洋の光」（～ 2018 年 1 月 11 日）
1 月　8 日	太平洋・カリブ学生招待計画 2018（～ 2 月 1 日）
1 月 18 日	第 343 回早朝国際情勢講演会（外務事務次官　杉山 晋輔 氏）
1 月 30 日	第 10 回国際協力懇話会（駐フランス共和国特命全権大使　木寺 昌人 氏）
2 月　5 日	上智大学よりインターンシップ科目受講生を受け入れ（～ 3 月 2 日）
2 月 10 日	ミクロネシア短期大学から麗澤大学への短期留学プログラム第 1 期生 カチューゴさんが修了・帰国
2 月 15 日	第 344 回早朝国際情勢講演会（外務省経済局審議官　飯島 俊郎 氏）
3 月 15 日	第 345 回早朝国際情勢講演会（前駐フィリピン共和国特命全権大使　石川 和秀 氏）
3 月 18 日	太平洋諸国リーダー招聘計画・フィジーよりカラン首相府次官を招待（～ 3 月 23 日）
3 月 20 日	APIC 佐藤嘉恭理事長がミクロネシア連邦を訪問（～ 3 月 27 日）
3 月 21 日	ミクロネシア短期大学創立 25 周年記念事業の一環として記念小切手贈呈
3 月 22 日	ミクロネシア連邦にて太平洋環境セミナー
4 月 19 日	第 346 回早朝国際情勢講演会（前駐サウジアラビア王国特命全権大使　奥田 紀宏 氏）
5 月　7 日	太平洋諸国リーダー招聘計画・ミクロネシアよりヘーゼル神父を招待（～ 5 月 15 日）
5 月 17 日	第 347 回早朝国際情勢講演会（外務省地球規模課題審議官　鈴木 秀生 氏）

※記事本文に掲載されている役職・機関名は、事業もしくはインタビュー実施時点における名称を採用しています。

「ミクロネシアと日本」講演会要旨

1. 日本は、明治維新後世界の仲間入りをし、その頃ミクロネシアとも初めての交流をもちました。1890 年代、はじめてカロリン諸島を訪れた日本の商船は、24 人の駐在商人（その何人かは元サムライ）を島々に送り込み、当時太平洋で盛んだったコプラ市場の占有率を獲得しました。その商人達の一部、とりわけ森小弁(もり こべん)は島々の著名な家系の祖先となったのです。

2. 1914 年 10 月、第一次世界大戦が勃発し、日本とイギリスはミクロネシアの島々を含む太平洋のドイツ植民地を占領し、日本海軍は 1920 年までこれらの島々を統治しました。これにより、島民たちは 30 年の間に 3 つの植民宗主国に支配されることになったのです。（1885 年～スペイン、1899 年～ドイツ、1914 年～日本）

3. 新しく設立された国際連盟は、島々を委任統治領と定め、1920 年、日本にミクロネシア地域（カロリン諸島、マーシャル諸島、北マリアナ諸島）の正式な統治権を与えました。その後 1 年弱の間に、日本は大勢の官僚たちをパラオに送り込むことで南洋庁の体制を築き、教会復旧のために外国人宣教師を招聘し、南洋庁下で島々を治める島民長たちを任命し、病院や診療所を地元住民のために開設しました。

4. 日本統治時代の最も重要な革新は恐らく、島々に初の公立学校制度が設立されたことでしょう。それ以前、唯一の公的教育は宣教師たちによる小さな学校がわずかにあるだけでした。日本が導入した教育制度は 3 年間の基礎教育、優秀な学生には更に 2 年間の教育機会を提供し、算数、地理、道徳、日本語の話し方と読み方、そして体育と基礎的な職業訓練を含みました。若い島民に基礎知識のみならず「規律意識」をもたらした日本統治時代の教育制度は、島の人々の記憶に何十年経っても残っているのです。

5. 日本統治時代の業績の一つとして、生産性と経済発展があげられます。従来、島民の主な収入源はコプラの生産でしたが、南洋興発会社や南洋貿易会社といった日本の企業はリン酸肥料の生産を拡大し、サイパンやその他領内の島々で熱帯野菜・果実・砂糖などの商業目的の農業を始めました。間もなく砂糖の生産は島の経済の中心となり、日本・沖縄からの 4 万人にのぼる移民に雇用機会を与えました。

6. 産業基盤の構築とそしてそれを担う日本人移民の流入は島の生活に大きな変化をもたらしました。島々には日本の文化や風情を彷彿とさせる活気溢れる街ができ、下水設備や電気が整い、精肉店や骨董品店、酒屋、氷菓子屋、自転車修理屋、多くの食堂や呑み屋などで賑わいました。サイパンのガラパンのような大きな街には置屋や銭湯、映画館、豆腐屋、刀工、酒造店もみられました。これらの街に住む人々の大多数は日本人でしたが、その繁栄による好景気は島民の生活様式にも大きく影響しました。島民は日本食を楽しみ和服を身に付けると共に、流暢な日本語を話すようにもなっていきました。

7. その後、太平洋戦争によって 25 年間の全てが逆転しました。日本の敗戦後、ミクロネシアにいた全ての日本国民が本国へと送還されました。これは、日本人男性と島の女性の結婚と家庭の崩壊、商業・農業における専門知識・技術・経験をもつ人材の流出など、様々な結果をもたらしたのです。

8. とはいえ、約 30 年間の日本の統治は島の文化や言語に多くの痕跡を残したことはかわりません。戦火を逃れた日本統治時代の建造物は、戦後、政府施設として使われてきました。島民の日本食嗜好は今も変わらず、日本の古い言葉の多くが今でもなお、島の言葉に取り込まれたままです。恐らく、戦後まもなくミクロネシアを訪れた日本人観光客はその古い言葉を耳にし、懐かしく思ったことでしょう。

9. 日本とミクロネシアは 1 世紀以上もの間、親密な関係を紡いできました。島々は日本を含む長い植民支配の時代から解放され、独立国家となりましたが、日本とミクロネシア 3 国（ミクロネシア連邦、パラオ共和国、マーシャル諸島共和国）は歴史を共有しお互い大切な「パートナー」であり続けることも事実なのです。

10. さて、今後この関係はどのように展開していくのでしょうか？

上智大学での講演会にて。左から APIC 佐藤昭治常務理事（元駐ミクロネシア 3 ヵ国大使）、フリッツ駐日ミクロネシア連邦大使、マツタロウ駐日パラオ共和国大使、ヘーゼル神父、キチナー駐日マーシャル諸島共和国大使、APIC 本多義人評議員、APIC 佐藤嘉恭理事長

太平洋諸国リーダー招聘計画

ミクロネシア学の泰斗　ヘーゼル神父を招待

APICは2018年5月7日～5月15日の間、ミクロネシアの著名な研究者フランシス・X・ヘーゼル（Francis X. Hezel）神父を日本へ招待いたしました。日本・ミクロネシア連邦の外交関係樹立30周年を迎える本年、同神父の来日を通して、両国の過去・現在・未来について考える非常に有意義な機会となりました。

◆APIC×上智大学主催　ヘーゼル神父による講演会

5月9日（水）には上智大学と共催で“Micronesia and Japan: The Islands that the Japanese Forgot”というタイトルのもと、ヘーゼル神父による講演会を開催しました。当日は、同神父の教え子であるフランシス・マツタロウ（Francis Matsutaro）駐日パラオ共和国大使をはじめ、ジョン・フリッツ（John Fritz）駐日ミクロネシア大使、トム・キチナー（Tom Kijiner）駐日マーシャル諸島共和国大使、上智大学の学生、その他一般の参加者など約130名が出席し、講演会に関する関心の高さがうかがえました。

質疑応答の際にはたくさんの質問があり、講演会終了後には多くの人が会場に残って、ヘーゼル神父との交流を楽しみました。

PROFILE

フランシス・X・ヘーゼル

1963 年にミクロネシア連邦のザビエル高校に赴任して以来、長年に渡り教師・神父としてミクロネシアの人々と社会に貢献。教え子の中にはミクロネシア地域の歴代大統領・外相などのリーダーが数多くおり、ミクロネシア社会で最も尊敬されている。他方で、ミクロネシアの歴史、社会に関する研究でも著名で、The First Taint of Civilization, Strangers in Their Own Land, The New Shape of Old Island Culture, Making Sense of Micronesia: The Logic of Pacific Island Culture などの著書がある。

◆長崎・大阪方面の視察

ヘーゼル神父は5月10日より長崎を訪れ、平和公園、長崎原爆資料館、さらにユネスコ世界遺産に登録勧告された潜伏キリシタン遺産などを訪問しました。さらに、大阪府吹田市の「国立民族学博物館」を訪問し、日本の専門家と意見交換を行った後、15日離日しました。

同神父は、自身が現在取り組んでいるミクロネシアの歴史に関わるプロジェクトで活かすことができる様々な情報や視点を得ることができたと、今回の訪問を大変喜んでいました。

なお、ヘーゼル神父による講演会の模様はミクロネシア各地の現地新聞で取り上げられ、大きく報じられました。（下の写真はミクロネシア連邦「The Kaselehlie Press」紙15面一面。）

滞在中のスケジュール

5/7（月）	来日 APIC 主催夕食会
5/8（火）	都内観光（明治神宮・靖国神社） ミクロネシア大使館主催昼食会 南洋貿易（株）訪問 （一社）太平洋協会主催意見交換会・夕食会
5/9（水）	上智大学にて講演会開催 上智大学主催夕食会
5/10（木）	長崎へ移動 西坂 26 殉教者の丘、大浦大聖堂 視察
5/11（金）	長崎離島巡礼
5/12（土）	平和公園、長崎原爆資料館、大浦天主堂、 グラバー邸、聖コルベ記念館 視察
5/13（日）	主日ミサ 大阪へ移動
5/14（月）	国立民族学博物館、大阪城 訪問
5/15（火）	離日

日本 26 聖人記念聖堂 聖フィリッポ教会での主日ミサの様子。イエズス会ヴィタリ神父（右）と

The Kaselehlie Press May 25 - June 10, 2018 15

Japan achieved successes in Micronesia unlike any nation before or since, says noted Historian Francis X. Hezel, SJ

Association for Promotion of International Cooperation

May 9, 2018

TOKYO – In the years before World War II, the Micronesian islands under Japanese rule were self-supporting, a level of economic independence never reached during the U.S. colonial period after the war or since independence in the mid-1980s, noted Pacific historian Francis X. Hezel, SJ, told a packed lecture hall at Sophia University.

Speaking to an audience of more than 130 -- including Palau Ambassador Francis Matsutaro, Federated States of Micronesia Ambassador John Fritz, and Marshall Islands Ambassador Tom Kijiner – Hezel said sugar cane plantations on Saipan, Tinian and Rota brought in more than 6 million yen, more than all other regional industries combined. Tuna fishing, which dried the fish and turned it into tuna shavings or katsuobushi at factories on Chuuk, Pohnpei, Palau and Saipan, produced revenue of over 5 million yen annually, Hezel said.

"The sugar industry was bound to have an enormous impact on these islands. For instance, the Japanese and Okinawan population in the Northern Marianas exploded, from well under 2,000 in 1920 to more than 40,000 by 1937," Hezel noted.

Hezel's lecture was titled, "Micronesia and Japan – The Islands That The Japanese Forgot." The Jesuit priest, who began serving in the Micronesian region in 1963, was invited to speak in Tokyo by Ambassador Peter Y. Sato, president of the Association for Promotion of International Cooperation, a private foundation that seeks to strengthen Japan's ties with nations of Oceania and the Caribbean, and Chancellor T. Sakuma, SJ, and President Yoshiaki Terumichi of Sophia University, the historic Jesuit school. The lecture was also part of a yearlong series of events marking 30 years of diplomatic ties between the Federated States of Micronesia and Japan by the FSM Embassy in Tokyo.

In 1914, at the outbreak of World War I, Japanese naval forces steamed from island to island in the Micronesia region to oust German colonists. The Paris Peace Conference in 1919 awarded the Micronesian islands to Japan as part of the newly formed League of Nations.

Hezel said that under Japanese rule, Micronesians made gains in public education and religion. Japanese authorities established the first rudimentary public school system, and offered three years of basic education for all islanders who lived within walking distance of one of the 24 public schools built across the region.

And Hezel noted that Japan encouraged Roman Catholic and Protestant missionaries to establish missions in the Japanese Mandated Islands. For instance, Admiral Shinjiro Yamamoto, who was a Catholic, appealed to the Pope for priests and brothers to be sent to Micronesia.

"Soon Spanish Jesuits were sent to open a new mission in the islands. Four pastors from the Japanese Congregational Church also arrived to begin work in Chuuk and Pohnpei. German Liebenzell missionaries were invited to resume their work and set up new stations in the west. And so non-Christian Japan brought in missionaries to assist it in its 'civilizing' mission," Hezel said.

The Jesuit priest, who has written a number of histories on the Micronesian region, also spoke about the Japanese who moved to the islands to set up trading companies. The first Japanese traders arrived in 1890 in Chuuk.

"They included Koben Mori, son of a samurai, and Mogahira Shirai, who had fought in the wars of the Meiji restoration," said Hezel. Mori is the great- grandfather of Emanuel "Manny" Mori of Chuuk, who served two terms as president of the Federated States of Micronesia.

Hezel said islanders missed the Japanese era in the post-war years. "When I first came in 1963, Micronesians expressed their fondness forfood (ramen, sushi, etc) and their nostalgia for the 'old days' of their Japanese schooling (including the strict discipline). On my first visit to Palau, I heard popular songs with Japanese-like melodies. Japanese names seemed to be everywhere," Hezel recalled.

He said the Japanese era achieved levels of success that were never matched by the U.S. during its post-war administration of Micronesia, or during the current independence era in the Marshall Islands, Palau and the Federated States of Micronesia, as well as the U.S. Northern Marianas Islands.

Hezel said during the Japanese period: Islanders were introduced to modern world, just as Japan itself had been a half-century earlier during the Meiji restoration. Not just dress styles, and songs, and rise of the towns, but through an education system.

Industry rose to new heights, with diversified exports. For one short period at least, the islands were able to pay their way in a global economy.

Island culture had been so transformed by its exposure to Japanese influence that the signs of this remain to the present.

Hezel noted that the Micronesian islands also affected a generation of Japanese who worked in the region.

"The islands had made their mark on the Japanese and Okinawans who had lived and worked there during the 1920s and 1930s," Hezel said. "Guntos were formed, regular meetings were held, and yearly books appeared with published accounts and photos of the old days. Pacific Island studies programs were established, and The Journal of the Pacific Society was published for years afterwards.

"Early tourism build up in the islands was Japanese, resulting from the historical and cultural ties. Saipan and Palau were the principal destinations– because they were closer to Japan, not just in geographical distance but culturally as well. The islands still bore the marks of Japanese presence," Hezel said.

But that was then, Hezel added. He challenged the Sophia University audience asking, "What will be the next phase of the Japanese-Micronesian relationship that is now more than a century old?"

右上：APIC 主催夕食会で挨拶するヘーゼル神父。
右下：神父を囲うザビエル留学生たち。
左：マツタロウ駐日パラオ大使による挨拶の様子。

◆APIC主催夕食会

5月7日（月）の夜にAPIC佐藤嘉恭理事長主催の歓迎夕食会が東京倶楽部にて開催されました。夕食会には、フリッツ駐日ミクロネシア大使、マツタロウ駐日パラオ共和国大使（ヘーゼル神父のザビエル高校での教え子）をはじめ、上智大学、津田塾大学、東洋大学等、多くの関係者が一同に会する機会となりました。

◆太平洋協会主催意見交換会・夕食会

5月8日（火）には、アジア会館にて、一般社団法人太平洋協会、太平洋諸島学会、APICの共催で、講演会、懇親会を開催いたしました。アカデミックな意見交換を目的として、ミクロネシア地域に関係する学術関係者やヘーゼル神父にゆかりのある方々が中心に参加しました。懇親会では、多くの参加者が入れ替わり立ち替わりヘーゼル神父を囲み、話に花を咲かせました。ヘーゼル神父にとっても、旧交を温める思い出深い夜になったのではないでしょうか。

また、太平洋協会の小林理事長は、歓迎スピーチの中で「ミクロネシアに居を置き、半世紀以上を地域研究、支援に捧げた人間をヘーゼル神父以外に知らない。」と、その業績を称えました。講演会と懇親会の合間にヘーゼル神父は、太平洋協会が管理運営する「アジア太平洋資料室」を視察。これまで太平洋協会では、小林理事長が中心となり、資料室の文献提供を通じ、ヘーゼル神父へ研究協力を行ってきました。資料室には、戦禍を免れた南洋群島時代の貴重な文献が所蔵されています。

太平洋協会主催意見交換会の様子

JAN
01

JICA地球ひろば　ミクロネシア写真展「南洋の光」

２０１７年12月14日から２０１８年１月11日までの約一ヵ月間、ミクロネシア写真展『南洋の光』（駐日ミクロネシア連邦大使館共催）がＪＩＣＡ地球ひろばで開催され、写真家フロイド・Ｋ・タケウチ氏による16枚の写真が展示されました。

開催初日のオープニングセレモニーでは主催者ＡＰＩＣの佐藤嘉恭理事長、ＪＩＣＡ越川和彦副理事長、そして作者フロイド・Ｋ・タケウチ氏による挨拶が行われ、ジョン・フリッツ駐日ミクロネシア連邦大使による乾杯の挨拶のあと、出席者一同は写真を鑑賞しました。会場には太平洋関係団体の方々が多く集いました。中には、元ＪＩＣＡ青年海外協力隊員でミクロネシアに派遣された方々も来場し、展示されている写真の風景を懐かしく鑑賞していました。

本写真展のタイトルに使用されている「光」にはふたつの意味が込められています。一つ目は、チューク環礁に降り注ぐ「自然の光」です。チューク環礁は第一次世界大戦後に旧日本海軍の拠点になったという歴史を持ち、今もなおその傷跡は残っています。写真には、戦跡が見られるダイビングスポットとしても有名なこの地の明暗鮮やかな自然の光がおさめられています。二つ目は「知識の光」です。チューク州ウエノ島マブチの丘には、ＡＰＩＣが留学生支援事業を行っているザビエル高校があります。４学年で学生数は２００人程度であるにも関わらず、これまでミクロネシア連邦のモリ前大統領やクリスチャン現大統領などといった西太平洋のリーダーを輩出してきた名門高校です。写真からは永遠の信仰や他者への献身の精神を軸とし、どこかあたたかさを感じる教育を見て取ることができます。

ミクロネシアも日本も豊かな自然を有するという共通点を持ち、歴史的にも密接な関連があります。また、ＡＰＩＣを通じて両国の若者も交流を深めています。写真に添えられた説明文を読みながら、来場者はミクロネシアをより身近に感じられたようでした。写真展のテーマともなった自然の光と知識の光は、経済困難など将来への不安を抱えるミクロネシアの現在を写し出すと同時に、来場した多くの人々に自然の美しさと感動を与えました。

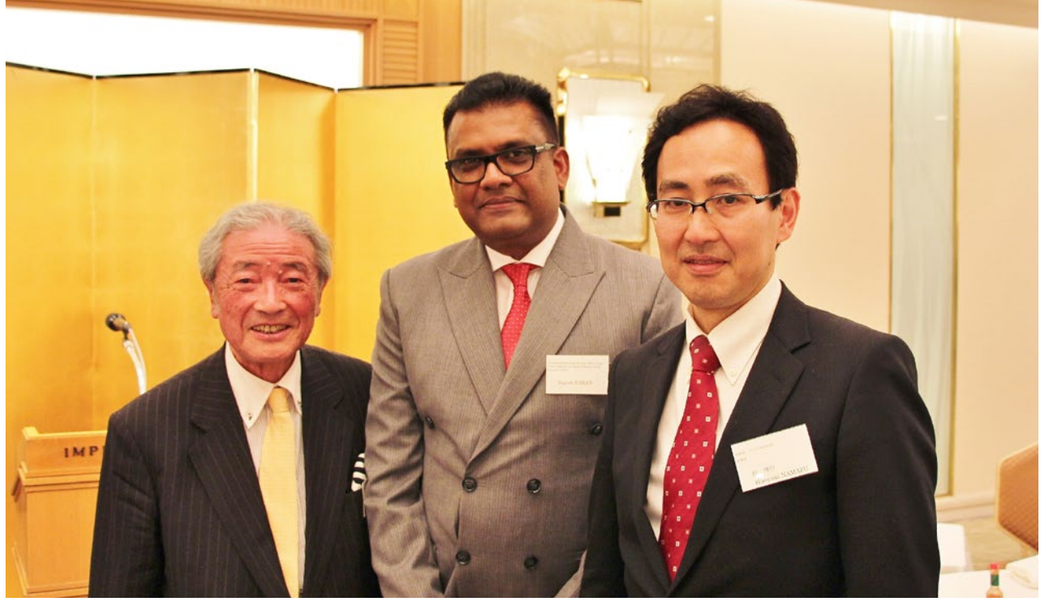
左から：フリッツ駐日ミクロネシア大使、APIC 佐藤理事長、タケウチ氏、JICA 越川副理事長

JICA 市ヶ谷ビル内の「JICA 地球ひろば」

太平洋諸国リーダー招聘計画
フィジー共和国からヨゲシュ・カラン首相府次官を招待

２０１８年３月18日から23日にかけて、ＡＰＩＣ太平洋諸国リーダー招待計画として、フィジー共和国のヨゲシュ・カラン（Yogesh Karan）首相府次官を日本に招待しました。

ＡＰＩＣ太平洋諸国リーダー招待計画は、太平洋諸国における対日理解の増進と両国間の友好関係増進を目的としたＡＰＩＣ独自のプログラムです。今回は、大村在フィジー大使の要請により招待したものです。



APIC 主催夕食会にて。左から：APIC 佐藤嘉恭理事長、カラン首相府次官、外務省アジア大洋州局鯰参事官

◆都内での視察

カラン次官は、訪日前より、単なる視察にとどまるのではなく実質的な意見交換等を行いたい、と希望しており、短い滞在スケジュールながら、精力的に数多くの面会や視察を行いました。日本滞在初日には、独立行政法人日本貿易振興機構（ＪＥＴＲＯ）の佐藤百合理事との面会、堀井巌外務大臣政務官との昼食会の後、首相官邸を訪れ、本国におけるカラン次官のカウンターパートの１人と言える、衛藤晟一内閣総理大臣補佐官（フィジー共和国議員連盟筆頭副会長）と意見交換を行いました。

滞在２日目には、環境省高橋康夫地球環境審議官、日本政府観光局（ＪＮＴＯ）松山良一理事長、独立行政法人国際協力機構（ＪＩＣＡ）江島真也理事と面会し意見交換を行いました。環境省では、２０１７年にフィジーが島嶼国として初めてＣＯＰ２３の議長国を務めたこともあり、気候変動を中心に活発な意見交換が行われました。ＪＮＴＯでは、日本とフィジーの間の直行便再開を踏まえた観光促進、両国間の人的往来の促進を中心に幅広い意見交換が行われ、カラン次官は実質的に実りのある訪問となり良かった、と感想を述べました。

◆ＡＰＩＣによる歓迎夕食会

滞在初日の夕には、ＡＰＩＣ佐藤嘉恭理事長主催の歓迎夕食会が帝国ホテルにて行われ、マタイトガ在京フィジー大使や外務省幹部をはじめ、日本国内におけるフィジー関係者が一堂に会する機会となりました。来賓として出席した衛藤晟一補佐官は挨拶の中で、２０１８年５月に開催される第８回太平洋・島サミットについて触れ、「同サミットを成功させるためにも、今後もフィジーとの連携を強化していきたい」と考えを述べました。カラン次官は非常にリラックスした様子で、最後の挨拶では、時折ジョークで会場の笑いを誘いながら、温かく迎えてくれたＡＰＩＣや関係者へ感謝を述べました。

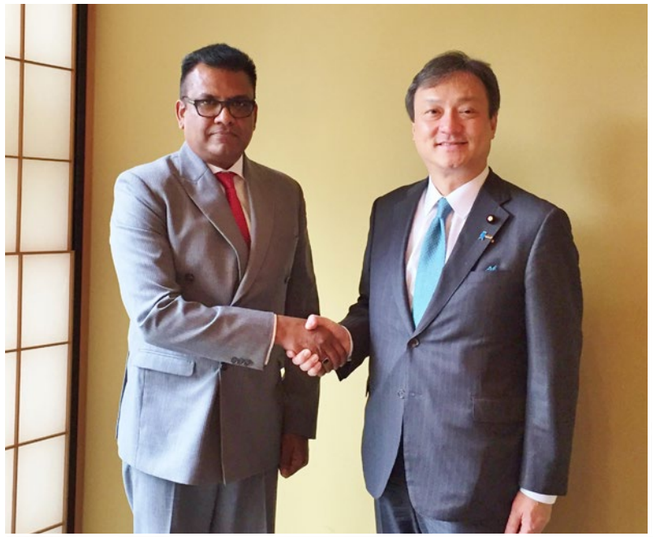
◆京都視察・石川関西大使による夕食会

日本滞在期間の後半、カラン次官は京都を訪れ、青蓮院、将軍塚舞台、六角堂を視察した他、金閣寺や龍安寺などを見学しました。三十三間堂では、千手観音像の迫力に驚かれ、二十八部衆からはヒンズー教の影響が色濃く、日本仏教との関係を興味深く感じ入られてました。また、日本の仏像の概念、技術的な特徴に感銘を受けていました。福寿園では茶道を体験し、貴重な経験ができた、と喜んでいました。また、京都滞在中に、外務省の石川和秀関西担当大使主催の夕食会に出席し、同大使と懇親を深めました。

カラン次官は、以前にも日本に来たことがあるので、今回の訪問ではとても懐かしい気持ちになったと喜んでいました。フィジーと我が国の相互理解増進という本計画の目的に、一歩近づくことができたと思います。

滞在中のスケジュール

3/18（日）	来日
3/19（月）	JETRO 佐藤理事と面会 堀井外務大臣政務官主催昼食会 衛藤内閣総理大臣補佐官と面会 APIC 主催夕食会
3/20（火）	環境省訪問、高橋康夫審議官と面会 JNTO 松山理事長と面会 JICA 江島理事と面会
3/21（水・祝）	京都へ移動、市内視察
3/22（木）	福寿園にて茶道体験
3/23（金）	東京へ移動、離日



左上：堀井巌外務大臣政務官と。　右上：衛藤晟一内閣総理大臣補佐官と。
左下：京都 福寿園にて。　右下：環境省でのブリーフィングの様子

MAR
03

ミクロネシア短期大学（COM-FSM）と連携強化

2018年3月20日～27日の間、APIC佐藤嘉恭理事長はミクロネシア連邦を訪問しました。この訪問には、APIC本多義人評議員と荒木恵理事・事務局長、上智大学曄道佳明学長、同大学大学院地球環境学研究科あん・まくどなるど教授、グローバル教育推進室向井優哉職員、テンプル大学ジャパンキャンパス（TUJ）加藤智恵上級副学長及びアリスター・ハワード最高教務責任者兼副学長が同行しました。

COM-FSM ハリス学長代行（右）と APIC 佐藤嘉恭理事長（右）

2018年3月21日、ミクロネシア連邦の首都ポンペイにある堀江良一駐ミクロネシア連邦大使公邸にて開催された夕食会の場で、ミクロネシア短期大学（College of Micronesia-FSM）のフランキー・ハリス（Frankie Harriss）副学長（学長代行）に対し、2万ドルの記念小切手を贈呈しました。

これは、COM-FSM創立25周年記念事業の一環として、同大学コスラエキャンパス図書館改修を行うためのもので、COM-FSM側からの要請に応じ、APICが支援することとしたものです。

COM-FSMとAPICは、これまで「上智大学ミクロネシア・エクスポージャーツアー」や「太平洋・カリブ学生招待計画」など、ミクロネシアと日本の学生交流促進のための共同プロジェクトを数多く実施しており、今後も両国の相互理解増進のために連携を深めていきます。

また、同夕食会では他に、COM-FSMとTUJとの間の覚書（MoU）調印式や、COM-FSM、ミクロネシア自然保護基金（MCT）、APICの3者間で上智大学大学院地球環境学研究科への留学に関する基本協定の調印式も行われました。今後、具体的な受け入れのための協定や制度づくりについて協議が行われます。

なお、今回の訪問及び支援について、ミクロネシアの現地新聞で紹介されました。（URL：http://www.mvariety.com/community-bulletin-sp-595/103299-apic-president-presents-major-gift-to-college-of-micronesia-fsm）

MAR
03

太平洋環境セミナー2018

2018年3月22日、ミクロネシア連邦のポンペイにおいて、第3回太平洋環境セミナーを開催しました。

APICは、2015年7月に上智大学と共催で「太平洋地域における環境保全シンポジウム」を開催して以来、環境セミナーシリーズとしてパラオ（2015年8月）、ジャマイカ（2016年10月）、マーシャル諸島（2017年3月）、バルバドス（2017年9月）と各地で環境セミナーを開催してきましたが、2018年3月22日、太平洋地域では3ヵ国目となるセミナーをミクロネシアの首都があるポンペイ島のコロニアにおいて開催しました。APICからは荒木恵理事兼事務局長が本セミナーに参加し、セミナーの司会進行を行いました。

今回の環境セミナーは、APIC佐藤嘉恭理事長のミクロネシア訪問と時期を合わせて開催し、佐藤理事長、本多義人評議員も参加しました。他にも、ピーターソンポンペイ州知事をはじめ、ミクロネシアの伝統的なリーダー、近くの高校生約10名など、合計60名を超える人が参加しました。セミナーは、ピーターソン州知事の歓迎の辞に始まり、佐藤理事長、共催の上智大学曄道佳明学長及びコストカ（kostka）ミクロネシア自然基金（MCT）事務局長、堀江良一駐ミクロネシア大使に挨拶を頂きました。

講師は、過去と同様に、上智大学とAPICの間で締結された連携協定に基づき、同大学大学院地球環境学研究科のあん・まくどなるど教授で、気候変動による環境の変化への対応と多様性の重要性についての約1時間の講義の後、質疑応答を行いました。

質疑応答では、ピーターソン州知事から、ミクロネシアではコメを主食とするように生活が変化してきているが、森林を開墾して田畑を拡大すべきかどうかという質問があり、まくどなるど教授は、日本の海女が自然環境を保護しつつ伝統的な漁業を営んでいるという自然とのバランスの例を紹介しました。また、コストカ事務局長からは、ミクロネシアでは環境保護のため伝統的な言い伝えはあるが、文書化されていないので、上智大学の協力を得て、そうした先人の知恵を文書化してほしいという要請がありました。この点に関しては、このセミナーに引き続き、まくどなるど教授の指導の下、上智大学大学院生14人が約1週間ポンペイ州の村落で聞き取りを行ってレポートを完成させるという調査・研究に繋がり、非常に意義のあるセミナーとなりました。

質問をするピーターソン州知事

JAN
01

太平洋・カリブ学生招待計画2018

横浜にて

本年度も1月8日から2月1日までの約一ヵ月間、太平洋島嶼国とカリブ諸国から合計16名の学生を招待しました。学生たちは滞在中、上智大学主催の短期プログラム January Session in Japanese Studies に参加しました。

本招待計画は昨年に引き続き行われ、本年度で3回目となります。招待学生は上智大学にて、日本語の必修科目に加え、選択科目として「日本の企業と経済」・「日本におけるメディアと時事」・「日本の教育」・「現代の日本文化と社会」の中から希望科目を2つ受講しました。これらの開講科目では小中学校などへのフィールドトリップや日本人へのインタビュー、プレゼンテーションを通して、日本の経済や社会、文化に対する学びを深めることができました。

また、初めて訪れる日本について、学生たちは「空港に到着して、まず感じたことは日本が寒いところだったということだった」・「渋谷のスクランブル交差点は人がたくさんいてとてもわくわくした」など感想を述べていました。それぞれの豊かな感性で日本を捉え、気候や風土、社会を新鮮な眼差しで観察していたようです。

授業外では、観光として横浜みなとみらいや千葉県香取市佐原、鎌倉などに足を延ばしたり、都内の杉並アニメーションミュージアムを訪れアニメの歴史を学んだりし、日本の伝統文化や歴史だけではなく、ポップカルチャーについても知見を広げました。平日にも授業の後に渋谷や新宿、秋葉原などに行き、限られた日数でより多く日本を体験しようと活発に探索を行った学生も多かったようです。夕食には上智大学の学生団体主催のイベントに参加して、しゃぶしゃぶを食べたり、たこ焼き作りに挑戦したりし、日本の食文化も堪能しながら、学生同士で楽しい時間を過ごしました。

今回参加した学生の出身地域・大学
（それぞれ２名ずつ）

大学名	学生の出身国・地域
University of the South Pacific	フィジー共和国
College of the Marshall Islands	マーシャル諸島共和国
College of Micronesia - FSM	ミクロネシア連邦
Palau Community College	パラオ共和国
University of the West Indies (Mona Campus)	ジャマイカ
University of the West Indies (Cave Hill Campus)	バルバドス、ガイアナ
University of the West Indies (Open Campus)	ジャマイカ、イギリス領ヴァージン諸島
University of the West Indies (St. Augustine Campus)	トリニダード・トバゴ

滞在中のスケジュール

1/8（月）	来日
1/9（火）	上智大学でオリエンテーション／都内バスツアー
1/10（水）〜1/12（金）	授業
1/13（土）	横浜訪問
1/15（月）〜1/18（木）	授業 JICA、大森第六中学校視察
1/20（土）	佐原訪問
1/22（月）〜1/26（金）	授業
1/27（土）	杉並アニメーションミュージアム訪問
1/29（月）〜1/30（火）	授業 八名川小学校視察
1/31（水）	APIC 主催フェアウェル・パーティー
2/1（木）	離日

滞在中のイベント

1/13 横浜訪問

横浜ツアーでは東京駅から新幹線を体験した後、横浜に赴きました。日本郵船氷川丸やカップヌードルミュージアムを見学し、自由行動では中華街や赤レンガ倉庫などの散策を行いました。学生たちは横浜の歴史的背景を学びつつ、カップラーメン作りや観覧車への乗車など新しい体験を楽しみました。

カップヌードルミュージアムでカップヌードル作りを体験

新幹線車内にて。学生全員が「初めて乗る」体験

1/18 大森第六中学校訪問

科目「日本の教育」を受講した学生はフィールドトリップで大森第六中学校を訪問し、日本の中等教育を視察しました。参加学生は「自国の教育機関と比べ、生徒が自立しており、全てがきちんと整理されている」と自国の教育と比較しながら、日本の教育現場を観察していました。

1/20 佐原訪問

上智大学と麗澤大学の学生とともに佐原ツアーに行きました。佐原では「小江戸」の風情が残る町並みを見学し、東京とは異なる日本の側面を見ることができたと学生たちも喜んでいました。「フィジーでも使う草でできた縄は、昔の日本にもあったのか」と感想を述べる学生もおり、共通点を二国間で見つけたようでした。その他にも、滞在中には舟めぐりや餅つきなど様々な日本文化を体感しました。

1/24 八名川小学校訪問

「日本の教育」を受講した学生は日本の初等教育を視察するために、江東区の八名川小学校を訪問しました。日本の災害対策がしっかりしていることや教師の献身的な教育に感心していました。留学生と小学生と交流する機会も設けられ、小学生も留学生たちの国や文化に興味が湧いたようでした。

1/27 杉並アニメーションミュージアム訪問

杉並アニメーションミュージアムでは、日本が世界に誇るアニメについて学びました。館内には鉄腕アトムやガンダムなど海外でも有名な日本アニメの資料が展示されていました。学生は日本におけるアニメの歴史が１９５０年にさかのぼることや、アニメ作成の工程の複雑さに驚いていました。

最終報告会にて。APIC 荒木理事・事務局長、上智大学曄道学長、上智学院高祖理事長（当時）を囲んで

1/31

APIC主催 フェアウェル・パーティ

プログラムの最終日には、日本での研修の総括として、上智大学で最終報告会と修了証授与式、フェアウェル・レセプションが執り行われました。報告会では、学生達が合計4つのグループに分かれ、日本滞在中に学んだことや感じたことに焦点を当てながら、プレゼンテーションを行いました。その後、上智大学の曄道学長から一人ひとりに修了証が手渡されました。学生たちの顔からは、プログラムを無事に修了できたことへの達成感が感じられました。

発表では、学生たちはプログラムで身に付けた日本語で自己紹介をしたのち、訪れた場所や興味深かった出来事の写真を見せながら、日本での滞在の感想を述べました。学生たちは日本の電車の路線の多さと乗り換えの複雑さに驚き、迷わないか心配だったことや、雪の降らない地域から来日したため、人生で初めて雪を目にした日には心が躍るような嬉しさを覚えたことなど、思い思いの感想を述べました。学生たちの発表からは、大学でのプログラムが充実していたことに加え、机に向かって勉強するだけでは決して感じることが出来ない「生の日本」を学生たち自身で体験できたことに喜んでいるようでした。また、発表の中では全ての学生が日本での滞在の機会に感謝していることを述べ、プログラムが非常に有意義なものになったことも垣間見えました。

修了証授与式の後のレセプションでは、学生たちが滞在中に出会った人々が集い、最後の交流を楽しみました。学生たちは込み上げてくる感情を抑えながら、再会を喜んだり、別れを惜しんだりしていました。その様子からは、約一ヵ月の滞在が非常に充実したものであったことが伺えました。

第3回目となる本プログラムも、昨年に引き続き大盛況のうちに終えることができました。学生間での交流が活発に行われ、招待学生と日本の学生の双方にとって学びを深める良い機会となりました。参加学生はこの交流プログラムで学んだことを活かしながら、自国の社会に貢献することが期待されています。APICは今後も「太平洋・カリブ学生招待計画」を通じて、島嶼国の人材育成に貢献し、国際交流・国際協力を推進できるように尽力していきます。

上智大学曄道学長（中央）とマーシャル諸島からの学生たち。曄道学長が持つ現地の新聞には学生たちを紹介する記事が掲載されている。

最終報告会にて日本での印象を話す学生

参加学生の声

プログラムに参加した16名の招待学生のうち2名及び日本人学生1名から感想文が寄せられました。（APIC和訳）

池田 将太 さん

麗澤大学　外国語学部
英語コミュニケーション専攻1年

今回、私は太平洋・カリブ学生招待計画に初めて参加しました。初日に成田空港へ出迎えに行ってから、週末に日本の観光地域への視察に同行させていただき、非常に多くのことを学ぶことができました。16人の留学生は初めて見る日本の風景に目を輝かせながら、日本の文化や言語について一生懸命に学びを得ようとしていました。そんな彼らの姿を見て、異文化理解の大切さや能動的な学びの意義を感じました。また、彼らと共に時間を過ごす中でそれぞれの国の文化や言語について私自身が新しい発見をすることができ、国内で異文化交流をする事ができる貴重な機会だったと感じました。

また、参加した留学生16人から「もう一度日本に戻ってきたい」「日本と自国のつながりを深めたい」という言葉を聞き、一ヵ月という決して長くはない期間の中で国境を越えて深い友好関係を築けた事を非常に嬉しく思っています。

ジャマイカより

キャンディス・デ・リサー さん

The University of the West Indies (Mona Campus)
Candice de Lisser

今回の日本への旅は私の人生の中で一番素晴らしい経験となりました。日本の習慣について学び、横浜、佐原、渋谷、銀座などといった素晴らしい場所を探検し、上智大学や東京周辺で素敵な方々と出会いました。

日本について好きなことのひとつは、高いレベルの礼儀正しさ、尊敬の心、他人への思いやりです。私をとても快く歓迎してくれました。朝食の時に「Ohayou Gozaimasu（おはようございます）」と言うのもとても楽しかったです。日本人は知らない人に対しても好意的で親切だということを発見しました。

また、日本の自然環境との調和が印象的でした。道路にはゴミひとつ落ちていませんでしたし、綺麗な花が咲いた鉢植えもたくさん見ました。このような街の様子を見て私はとても嬉しく思い、癒されました。また、街の周辺に神社があるのも、自然との調和をという意味を強く感じました。

日本の食事も大好きでした。用意された料理には「作る喜び」を感じました。私のお気に入りの食べ物は、新宿で食べたラーメンとお寿司です。お店の人はとても親切で礼儀正しく、食事が一層楽しかったです。

上智大学で学ぶのも楽しかったです。海外の学校の授業に出席するのは初めての経験でした。私が好きだった科目は、「現代の日本文化と社会」コースの中にあった「日本の心理学」の授業と、「日本語」です。日本人や他の東洋の国々での考え方は、西洋人の考え方と比較して違いがあることを学びました。

ジャマイカ人が日本人の立ち振る舞いや、他人への配慮、環境との調和を取り入れられたら良いなと思います。お互い優しく接し合い、自分たちの環境をもっと大事に扱うことが出来たら、私たちはもっと幸せな人々になると思います。

将来、また日本に訪れたいと思っています。その時は、日本で勉強して働けたらいいなと思います。

横浜でクレープを食べるキャンディスさん（右）

フィジーより

シャジェンドラ・ジート さん

The University of the South Pacific
Shajendra Jeet

日本の成田空港に到着して最初に経験したのは「寒い」ということでした。しかし、空港で私たちのことを待ってくれていた方の嬉しそうな表情と歓迎の笑顔を見た瞬間、全てが変わり、くたくたになるような飛行機や肌寒さを忘れてしまいました。私たちは「友達」であるとわかりました。

私は子供の頃からずっと日本の文化や友好的な人々の話を耳にしてきました。日本は昔、「戦争」に関与したことがあるものの、私はいつも日本という国とその国民の立ち直る力について思いを巡らせていました。そのため、このプログラムに参加することになったとき、私は全てを「直接」経験したいと思い、これから行く場所やそれがどのようなところであるかについて事前に調べることは一切しませんでした。

東京での一日目、私は高いビルや綺麗な道路、車の種類の多さに感心していましたが、中でも特に感動したのは人々の立ち振る舞いでした。上智大学へ行く途中で見かけた人々はみんな温かい笑顔と伝統的な「おじぎ」をしてくれました。

上智大学では「日本語」、「日本の教育」、「日本の文化」の三つの科目を受講し、どれも興味深かったです。私がこれらを選んだのは、日本は何故私の母国フィジーと比べるとこんなにも違うのか理解したかったからです。大学で学ぶことはとても楽しかったですが、一番良かったのはAPICに企画していただいたイベントでした。何故神社とお寺が隣り合わせに建っているのかを知るのは面白かったですし、千葉（佐原）では、18世紀かそれ以前からずっと続いている日本の文化が保存されていて、本当に素晴らしかったです。

全ての中で一番興味深かったのは、小学校と中学校の見学でした。ここでは、私の日本人の本質に対する疑問の答えが見つかりました。私は好奇心から、どうやって子どもたちに規則を守らせているのか、学校はどのようなシステムになっているのかなど、先生にたくさんの質問をしました。そこで私は、子供たちは学校で難しい問題について考えて学び、お互いを尊重しあい、母なる自然も尊重するようになっていくことに気付きました。また、学校では処罰は一般的ではないことも驚きでした。これは日本が素晴らしい地域社会、共同体、国になる秘訣だと信じています。そして何故日本が犯罪率が低く、人々はとても礼儀正しいのかという理由だと思います。

今回の日本への旅ではたくさんのことを学ぶことができました。その中でも最も重要なのは愛情を込めて人と接する、ということです。心から大切にしたい経験となりました。私にこのような機会を提供してくれたAPICとその関係者に感謝の気持ちを述べたいです。

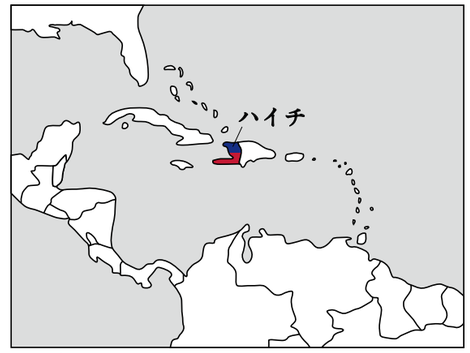
オリジナルの「カップヌードル」でフィジーの伝統文化を紹介

ハイチ便り

寄稿：在ハイチ日本国大使　八田　善明

APICウェブサイトでは、2018年2月から毎月一回、八田善明 在ハイチ日本国大使寄稿の連続コラム「**ハイチ便り**」を配信しております。日本で知られることの少ないハイチ共和国の政治、社会、文化などについての情報を発信し、日・ハイチ関係の増進を目指します。本ページでは、第一回「**ハイチ便り**」の内容を掲載しています。

その他の「**ハイチ便り**」については、こちらのページ（http://www.apic.or.jp/projects/haiti000.html）をご覧ください。



カリブ海に浮かぶ島国「ハイチ共和国」

今回から、カリブ海の小さな島国であるハイチ共和国（以降ハイチ）について連続コラムで御紹介してまいります。

ハイチは、必ずしも日本において馴染みのある国ではないかも知れませんが、実はどこかで耳にしたことがあるそうです。2010年のハイチ大震災や2016年のハリケーン・マシューといった地域を越えて報道された大規模災害とそれに伴う国際的支援のあり方、実に様々な分野で国際的に活躍しているハイチ出身の人々、ヴードゥー教、ハイシアン・アート、コーヒー、カリブ海クルーズからオレンジリキュールのグランマニエの原料まで、何かお心当たりはないでしょうか？

また、近隣では、ドミニカ共和国とは隣国としてイスパニョーラ島を分かち、海を隔てたところにはキューバやジャマイカがあります。

■「アンティル諸島の真珠」

ハイチは、かつては「アンティル諸島の真珠」とまで称された時もあったものの、最近の報道の見出し等では、「西半球の最貧国」、「いまだ大地震の痕」そしてトランプ大統領発言まで、かなりネガティブで可哀想なイメージが前面に出ることが多いように感じられます。

■厳しい歴史

やはり、ハイチを理解するためには厳しい試練の折り重なる歴史的な過程を知らずにしては通れません。足早にみてみますと、15世紀にコロンブスら大航海時代のスペイン人がカリブ海のアンティル諸島の島（イスパニョーラ島）を発見・入植し、先住のタイノ等の住民は使役の果てに絶滅したというところから始まります。後に島の西側をスペインから条約で得たフランスの統治下では、少数のフランス人支配階級の下、絶滅した住民に代わり、労働力としてアフリカから奴隷貿易で連れてこられた大量の奴隷達による大規模なプランテーション（コーヒーや砂糖等）が展開されました。

一時は、砂糖だけでも欧州の砂糖総輸入量の40％を占め、コーヒーに至っては当時の世界の総生産量の50％を産出する程の生産拠点として栄えたと言われています。こうしてハイチの原型が形作られましたが、実は、最初に「アンティル諸島の真珠」と呼んだのは、それらの入植者であり、必ずしも後のハイチが自称したものではありません。また、今日のハイチ人の姓の多くが名前（ファーストネーム）に由来していること（当時、奴隷にはファーストネームしかなく、奴隷解放後に姓を持つことになった際にそれまでの名前を維持するためにそうなったとされている。例えば、ジョゼフ、ジャン、ピエール、ルイという姓がかなり多い。）等からも、歴史の意味と重さを感じさせられます。

■最初の黒人共和国

かくして苦難の末に、1804年、アフリカ系の奴隷と混血のムラートらによる壮絶な独立戦争により「世界最初の黒人共和国」として独立国となりました。その時に力を合わせて自由を勝ち取ったことから、「団結は力なり（仏語：l'Union fait la force）」がハイチの国是となり国旗（国章）にも記されています。

このように、独立と自由を勝ち取った栄光の歴史を人類史上に残したものの、その後も道のりは平坦ではありませんでした。旧宗主国のフランスによる賠償金要求、国内政治の不安定、世界情勢を睨んだ米国による占領時代、デュバリエ父子政権圧政による頭脳と技術者の流出、再度の政治的不安定を経験して今日に至っています。厳しいことに、これら政治的不安定に加えて、数年に一度の割合で大小のハリケーンや洪水等の自然災害に見舞われることも社会経済的混乱の基となっています。

■西半球の最貧国

それでは、今日のハイチが実際にどのような国であるのか。先ず、「西半球の最貧国」という点については、データの上でも、一般的な社会経済的要素からみても嘘ではありません。事実、厳しい経済社会状況が目の前に広がっています。一人あたりの国内総生産は780米国ドル（世銀2016）とこれだけでも決して高くはありませんが、いわゆる国内貧困ラインでみれば、実に国民の59％（600万人：2012）、1日1・23ドル以下の極度の貧困ライン以下は24％（250万人）とその厳しさが浮き彫りになります。食料自給率（農業）についても45％前後であり、食料はもちろんのこと、建設資材、衣料品、携帯電話、家電、日用雑貨に至るまで、生活や経済を支える多くのものは輸入に頼らざるを得ない構造となっています。

また、近年の政治的不安定により、通貨グルドが対米ドルで大きく下落し、輸入依存体質とも相まってここ数年毎年前年比10％超の高インフレが続き、ただでさえ困窮している者にさらに鞭打つ状況が続いています。悪いことに、これだけ貧富の差があり、かつ貧困の度合いも悪いと、都市部を中心に様々な理由からスラム街が形成されます。現在においても、首都圏だけでも大きなスラム街が幾つもあり、無法地帯となって複数のギャングの巣窟となり、スラム内外における治安の悪さの原因となっています。この治安の悪さ、人命の安さがスラムからにじみ出て来るため、富裕地区とて白昼でも安

カリブ海

心できません。当然、経済社会的にもいい影響を与えていないことは容易に想像できるかと思います。

■大きな社会格差

筆者を含めてハイチ（首都圏）に訪れた人が、見て、肌で感じることは、おそらく社会的格差の大きい2スピードのアンバランスな社会経済状況です。先ず、200万人を超える人口を抱える首都圏において、上下水道設備がなく、電力の供給が不定期で一日2～3時間のこともあり、事実上ほとんど機能していないゴミ収集・処理能力を圧倒的に凌駕するゴミが散乱する市街地、それらのゴミに集まる放し飼いのブタ、ヤギ（カブリ）、ニワトリ達（時々ウシも）の群れ、道路を闊歩し人々と共存する野良犬。道路は舗装されているところとそうでないところの差が大きく、街中でもほとんどが四輪駆動車（日本車が圧倒的に人気）か同ピックアップ車である等、色々な衝撃を与えるものです。

首都ポルトープランス

その一方で、富裕層は、その邸宅、高級車、足繁く出入りする娯楽施設やレストラン、高級洋品店、輸入品の並ぶスーパー等、当然のことながらすべてにおいて欧米での価格水準を上回る中で先進国並みの生活を維持していますが、このようなことはだんだん目が慣れるにつれてようやく見えて来ることでしょう。なぜなら、これらの多くは高い塀とショットガンを持ったガードマンに守られた中にあるからです。

■ハイチ大地震

こうして現在も厳しい経済社会状況にあるハイチですが、2010年1月のハイチ大地震（マグニチュード7.0）の爪痕の方はというと、多少の政府機能や建物等に回復しきれていない面は残るものの、市民の生活、学校生活、経済活動に関しては、新しい商店やレストランの出店、起業や新しいビルの建設等も進んでおり、基本的には復興期は脱し、中長期の開発フェーズに戻っていると見受けられます。その後、2016年10月には追い打ちをかけるようにハリケーン・マシューの猛威が南部を直撃し、穀倉地帯が大打撃を受けましたが、これも少しずつ持ち直してきています。

街角で売られるハイチのアート

■新大統領の誕生

そうした過程を経つつ、2017年2月には長い選挙期間を経て、モイーズ新大統領が誕生し、急ピッチで国内開発を推進し始めました。また、懸案の治安状況についても一定の改善が見られるとして、2017年10月、13年間展開したいわゆるPKOの国連ハイチ安定化ミッション（MINUSTAH）が去り、縮小した後継ミッションに移行している等、状況が改善していると見られる分野もあり、方向性としてはポジティブな変化の兆しはあります。

このように、苦難と試練には枚挙をまたないハイチですが、これを耐え抜く忍耐力とエネルギーを持った人々が元気に生きている社会でもあります。単に楽園的なカリブ海の島国でもなく、また単に貧しい国でもない側面も含めて、次回は社会生活面を少々御紹介しつつ、それ以降は様々なテーマを掘り下げてみたいと思います。

（※写真は筆者が撮影）
（※本コラムの内容は、筆者の個人的見解であり、所属する機関の公式見解ではありません。）

ザビエル留学生奨学金

第5期ザビエル留学生 2名決定

2018年のザビエル留学生としてポール・チャーリー君（ミクロネシア連邦コスラエ州出身）とクロエ・アーノルドさん（チューク州出身）の2名が決定しました。2名は本年9月上智大学に入学、国際教養学部で4年間留学生活を送る予定です。

APICが2014年、上智大学とミクロネシア連邦ザビエル高校と協力して創設した本留学生制度では累計7名の学生が我が国で学ぶことになります。

また、地元英語紙には、2名の留学合格を報じる記事が掲載されました。（左：「The Kaselehlie Press」9面　下の記事）

The Kaselehlie Press　May 25 - June 10, 2018　9

FSM President Peter Christian speaks to PALM leaders on Cooperation in the International Arena

"At the outset, I convey warm greetings from the leaders and people of the Federated States of Micronesia. I wish to join the previous speakers in expressing my appreciation to Prime Minister Abe and for the invitation, and to the leaders and people of Fukushima Prefecture and Governor Uchibori, especially Mayor Shimizu of Iwaki City for their very, very warm welcome and courtesies. I commend the organizers and all those involved in the preparations and arrangements.

"Co-Chairs, it is my pleasure to make a short comment on the assigned topic of Cooperation in the International Arena; and specifically, I would like to address the Korean peninsula issue.

"From a Pacific perspective, it is absolutely safe to say that all of us want to see peace on the Korean Peninsula, and in this region in general. Also, we know that this Peace we wish for is not to be found in a "one stop shop," nor with the right of might. We know from recent events that this is simply wishful thinking.

"For peace in the Korean Peninsula to become a reality, it must be formulated from within and be embraced by those who live there; supported by all of us first as a people for peace, and even more so as members of the United Nations. Peace for the people of the Korea's means peace for our region.

"The Democratic People's Republic of Korea and the Republic of Korea have made that first attempt—that first important step.

"I, like many other Pacific Islands leaders, applauded this effort to bend into the wind, or reach over a burning furnace to exchange a handshake that may usher in and embrace the start of meaningful and respectful dialogue; ultimately towards a lasting calm and peace for the Korean Peninsula, and for all of us who share with them the Pacific Ocean.

"First meetings are always difficult, and can be made more difficult if there are preconditions made to be met before any sit down. Preconditions can discourage, even derail any effort to meet.

"I am often amazed at how much is the "take away" from meetings from which no one expects satisfying results, and how surprisingly history will often record that those first meetings are pivotal.

"There are many more things that we who sit on the sidelines wish for, for all our sakes.

"First and foremost we wish that the climate and environment of the meeting be calm, and civility be its central décor. That after the noodles are done, and Mr. Trump and Mr. Kim are served their Chocolate dessert, both would realize how easier it is to speak softly across a table, rather than shout at each other their ideas of fire, fury, and total destruction across the Pacific Ocean. This only causes fear in those whose only role is to wish for peace.

"Little as our voice may be, the leaders of North Korea and South Korea acknowledged receiving a letter from the Federated States of Micronesia congratulating and encouraging the two leaders good effort towards possible reconciliation.

"As I speak from Micronesia and for the people of Micronesia, I cannot help but remember that my government has a very special relationship with Mr. Trump's America. Like Republic of Palau and the Republic of the Marshall Islands, The Federated States of Micronesia is more than just a diplomatic ally of the United States; we have a strategic defense and security agreement with the United States of America.

"A man I know little about advises us that with great power comes great responsibility. It was a paraphrase of Luke 12:28 that reminds us that to whom much is given, much is expected.

"The United States of America is strong. And the strong can and should afford to be humble with their strength and might. Sitting down for a few words with Mr. Kim is more than just an "America First" show of strength. It is an exhibit of the character that America is known for.

"We continue to hope first for calmness among peoples and nations. Mostly, I long for normalization and lasting peace for the Korean Peninsula. And in my humble opinion such a wish can only be realized by two countries—The Democratic People's Republic of Korea (North Korea), and the Republic of Korea (South Korea)."

Two Xavier High School students receive coveted APIC Scholarships to study at Sophia University in Tokyo

TOKYO – Two graduating seniors from Xavier High School in the Federated States of Micronesia have been awarded the coveted APIC Scholarship that covers all expenses related to full-time degree studies at Sophia University in Tokyo, Japan.

Chloe RoseAnn Arnold of Chuuk State and Paul Charley, Jr. of Kosrae State, both in the Federated States of Micronesia, will begin studying for undergraduate degrees at Sophia University this fall. They will join five other undergraduate and two graduate students, all graduates of Xavier High School, who are studying at Sophia University as earlier recipients of the APIC Scholarship program.

Arnold, who was part of a group of international student researchers that studied climate change in the Arctic last year, is class valedictorian. She has been on the honor roll for every semester she's been at Xavier High School.

Charley, Jr., has been active in school and community activities from his freshman year. He's also played leading roles in class and student body government activities.

"We are pleased to award this year's APIC Scholarships to Chloe Arnold and Paul Charley, Jr.. This scholarship program is one of the most successful in the Micronesia region. It recognizes the academic achievement and leadership potential of the recipients, as well as the special role Xavier High School and Sophia University play in promoting learning and educational growth in their respective countries," said Ambassador Peter Y. Sato, president of The Association for Promotion of International Cooperation (APIC).

The full-ride scholarship is sponsored by APIC, a private foundation in Tokyo dedicated to strengthening Japan's relations with the nations of the Pacific Islands and Caribbean. The APIC Scholarship, which is awarded to two Xavier High School graduates each year to study at Sophia University, was organized by Ambassador Peter Y. Sato and Ambassador Shoji Sato, APIC's executive director.

Both men are retired career Japanese diplomats. Peter Sato's last post was as Japan's Ambassador to China. Shoji Sato served as Ambassador to the Federated States of Micronesia.

Paul Charley, Jr. Kosrae
Chloe RoseAnn Arnold Chuuk

▶第５期ザビエル留学生

ポール・チャーリー 君
Paul Charley Jr.

クロエ・アーノルド さん
Chloe Arnold

「オールソフィアンのクリスマス」で歌を披露するザビエル留学生たち

―ザビエル高校―

ザビエル高校は1952年、ミクロネシア連邦チューク州ウエノ島にイエズス会によって設立されました。4年制の男女共学で、生徒の数は約150名です。北太平洋地域で最も著名な高校で、ミクロネシア連邦のみならず、パラオ共和国、マーシャル諸島共和国などからも生徒が集います。生徒の学業水準はこの地域において最高水準であり、過去の卒業生には、モリ前ミクロネシア連邦大統領、クリスチャン現大統領をはじめ、この地域の政界・経済界のリーダーを輩出しています。

APICにて インターンシップを体験

～ 上智大学グローバルインターンシップ ～

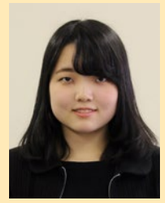
修了証を受け取るインターン生の山本さんと APIC 佐藤昭治常務理事

2018年2月5日～3月2日の間、上智大学インターンシップ科目の就業体験として、1名のインターン学生がAPICでの実習を行いました。

上智大学インターンシップ科目は、夏期及び春期の授業休業期間中に約一ヵ月の就業体験を行い、併せて事前・事後講義への出席や課題提出を行うことで単位が付与される、上智大学の正式な授業科目のひとつです。

APICは、40近くある本インターンシップ科目の就業実習受け入れ先のひとつとして、2016年2月より毎回数名の学生を受け入れてきました。APICでのインターンシップでは、電話・来客対応や文書作成などの一般的な業務はもちろんのこと、外務省幹部などを講師に招いて行う講演会の運営や外国からの要人招待の際のアテンド補助など、様々な業務を体験します。

今回参加した上智大学の山本明日香さんはインターン期間中、APIC村上洋理事へのインタビュー記事の作成を業務の一環として担当しました。インタビュー内容は本会報誌に掲載されています（23ページ参照）。



インターンを終えて

上智大学
法学部2年
山本 明日香 さん

APICのインターンへ参加を希望したのは、国際協力に携わる組織の一員とさせていただくことで国際協力に対する理解を深めたいと思ったからでした。実際インターンを通して得たものは、国際協力や業務内容についての理解だけではありませんでした。この一ヵ月間の最も大きな収穫は、学びと経験の大切さに改めて気付けたことだと思います。

村上洋理事へのインタビューで、“fail fast, fail cheap, fail smart”とアドバイスを頂きました。若いうちは失敗しても取り返しがきくから、そこから何かをつかみ取れる限り何事にも進んでチャレンジしなさい、という意味です。春休みの過ごし方が無限にある中でもインターンの参加を決意したことは、私にとってひとつのチャレンジでした。挑戦したことで、日本と太平洋島嶼地域・カリブ海地域との協力関係を知ることができ、インタビュー記事を作成する中でアポイントメントの取り方や質問事項の作成などといった事前準備から実際の記事執筆までの一連の流れを学びました。また、佐藤常務理事（兼上智大学客員教授）と日々お話しする中で、読書や大学の授業で自分の知識を蓄え、その知識をもとに自分の頭で考えることの大切さに気付かされました。

私がインターンから多くのことを学び得たように、経験した者にしか体得できない学びはたくさんあります。今後は授業等で知識を得るのと同時に、失敗を恐れず多くのことを経験することによって学びを深めていこうと思います。そして豊富な知識や経験が、国際協力に携わる上で重要な多角的な視点や価値観を理解し行動することにつながると考えています。

最後に、APICの皆様をはじめ、学びと経験の場を与えてくださった全ての方々に感謝いたします。

株式会社エヌアイデイ、上智大学、そしてAPICの三者で共催されてきた日本体験プロジェクト「Sawara Experience」は、次回2018年6月の実施で第三回を迎えます。この事業を通して三者は、江戸文化を伝える佐原で留学生と地元の方々との交流を通し、人と人との結びつきを深めることを目指します。また、留学生と市民の相互理解を促進し、佐原において世界各地とのネットワークが構築されるよう尽力していきます。

2017年10月に実施された記念すべき第一回では、上智大学で学ぶミクロネシア連邦出身の7名の学生とともに、ユネスコ世界無形文化遺産に登録されている「佐原の大祭」に参加しました。丸一日に及ぶお祭り体験を通して、学生たちは充実した時間を地元の方々と共有するとともに、お祭りの宗教的な側面や伝統的な風習に触れることができました。

2018年1月に実施された第二回には、「太平洋・カリブ学生招待計画」の招待学生16名が参加しました。学生たちは餅つきや切り絵などの古くから変わらない日本の「形」を体験するとともに、「水の町・佐原」を象徴する遊覧船に乗り、江戸風情が色濃く残る佐原の町を陸から、そして水上からと余すことなく堪能しました。

同年6月実施予定である第三回佐原体験では、上智大学祖師谷国際交流会館に入居中の、世界各国から集まる留学生とともに佐原の町を訪れます。今回、参加者たちは町の散策だけでなく、地元の佐原高等学校弓道部の協力のもと、弓道にも挑戦します。日本の文化や作法を色濃く受け継ぐ弓道というスポーツを通して、留学生と地元の方々とのさらなる絆を築いてまいります。

第二回佐原体験で、切り絵を体験する学生たち

Interview

味の素株式会社　社外監査役 村上 洋　APIC理事

APIC 役員に聞く

本会報誌では、APICの活動を支える理事・評議員へのインタビューを行っております。第6回となる「APIC役員に聞く」では、村上洋理事（味の素株式会社社外監査役）にインタビューをお願いし、ご自身の経験に基づいた国際協力への見解と、若い世代へのメッセージについてお聞きしました。【聞き手：APICインターン生 山本（上智大学）】

Q1・APICの理事に就任されたきっかけはなんですか。また、理事として特に重視されている活動があればお聞かせください。

私は40年近く東レ株式会社に勤務していましたが、そこで海外事業全体を統括する国際部門長という立場にいたとき、月に1回APICの早朝講演会に参加させて頂いていました。佐藤嘉恭理事長、佐藤昭治常務理事と懇意にさせて頂く中で、これまで官職について いらした方が中心だった理事会の運営に、ビジネス界出身者にも参加して欲しいとお話を頂きました。まだ就任して1年余りですが、国際協力をグローバルビジネスの視点で見る立場として少しでも貢献できればと考えています。

Q2・学生時代、ご自身の将来についてどのようにお考えでしたか。

私が学生時代を過ごした70年代前半は、まだ60年代に盛んだった学生運動の名残が残っていました。今のように真面目に授業に参加する学生も少なく、試験前にはストライキがあったので学生時代に試験を受けたことは一度もありませんでした。その分、サークル活動や自主的な勉強会、あとはアルバイトや旅行などをして結構気ままに過ごしていましたね。自分の将来についても、今のように就活が大変でなかったこともあって、あまり真剣に考えていなかったような気がします。しかし、今振り返ってみると無意識のうちに東レが企業理念としている「新しい価値の創造を通じて社会に貢献する『ものづくり』」には魅力を感じていたようです。複数の「ものづくり」企業を訪問し、一番フィーリングのあった東レに入社しました。

略歴

1975年	京都大学法学部卒業
同年	東レ株式会社入社
2000年	トーレ・インダストリーズ（アメリカ）社副社長
2008年	アメリカ地区全般統括 兼 在アメリカ東レ代表 兼 トーレ・インダストリーズ（アメリカ）社社長
2011年	取締役国際部門長
2013年	常務取締役 海外担当 国際部門長
2016年	役員退任、東レ株式会社顧問
同年	味の素株式会社社外監査役（現任）
同年	上智大学客員教授（現任）
2017年	（一財）国際協力推進協会理事（現任）

Q3・40年近く東レ株式会社に勤務し、入社後まもなく日本初となるプラスチックペットボトルの企画にも携わっていたと伺いました。入社当時と比較して、現在の日本企業にはどのような傾向がありますか。

入社当時はアメリカでコーラの容器としてペットボトルが使われ始めたころでした。日本でも各社が開発を急いでいて、私は入社して最初の仕事で「ペットボトル用材料の事業化」の企画書を書く仕事を担当しました。今では、日本だけでも何百億本というペットボトルが出回っていますが、その1本目が私が書いた企画書から始まったということは、私のサラリーマン人生の中でもちょっとした自慢の種になっています。

東レは60年代にタイやインドネシアなどの東南アジアに進出し繊維の生産を開始しましたが、欧米に進出するようになったのは80年代以降、中国は鄧小平さんの「改革開放政策」が始まった90年代以降で、それから一気にグローバル化が進展しました。このような時代だったのでまさか自分が海外に行くとは思ってもいませんでしたが、担当していた製品がアメリカに進出することになったのをきっかけに自分もグローバル化の波に巻き込まれていき、計12年アメリカに駐在することになりました。今の学生さんにとっては、「社会に出る＝グローバル化と向き合う」ことだと考えています。日本企業も全てをグローバルベースで考えなければいけない時代になっています。

Q4・アメリカ勤務やアジア・新興国事業拡大プロジェクトの事務局長のご経験があると伺いました。グローバル企業が増加する一方で、人権リスクなどの様々な問題点を抱えているという報道も数多く見られます。日本企業は海外進出をするにあたりどのような点を改善すべきだとお思いですか。

アメリカの駐在に加え、アジア・中東・ロシア・アフリカなど30カ国以上に出張しました。海外にある東レの会社に勤めている人が全体の6割を占めているので、自分も半分くらいの時間を海外で過ごす勢いで世界を飛び回りました。事業の進め方、マネジメントの仕方、人事や労務、どれを取ってみても日本のやり方をそのまま押し付けたのではうまくいきません。それぞれの国の文化、習慣、国民性にあったやり方を考えていく必要があります。そのためにも、海外で現地の政府やパートナーと良い協力関係を築きながら仕事をすることが大事だと考えています。

海外に進出してきた理由のひとつは安いコストで生産できることでしたが、現在は自社だけでなく取引先での児童労働や粗悪な職場環境など人権にかかわるような問題にも配慮しなければ許されない時代です。武装勢力に資金が流入する紛争鉱物を購入していないことの確認も求められます。このようにグローバルに仕事をするにあたっては、全てグローバル基準で物事を考えるのが当たり前になっていて、そのための人材の育成や社内の体制をとっていく必要があると考えています。

インタビュー中の様子

Q５・東レ株式会社が炭素繊維の普及において環境保全に貢献している例もありますが、日本企業は国際協力に対してどのように貢献していくべきだとお考えですか。

東レの企業理念は「新しい価値の創造を通じて社会に貢献する」です。東レの炭素繊維は飛行機や自動車の軽量化を可能にし、ＣＯ２排出量削減という面で社会に貢献しています。また、海水を真水に変えることができる水処理膜は水不足解決に貢献しています。アメリカに駐在しているときにこのような東レの事業活動が認められ、国連協会から社会への貢献が認められる企業や個人に与えられる、ヒューマニタリアン賞を受賞しました。私も受賞パーティに参加したんですよ。東レは「素材には社会を変える力がある」と考えて新素材の開発に取り組んでいます。あまり知られていませんが、東レがユニクロとヒートテックの技術を共同開発したという例もあります。

私が今社外監査役をしている味の素では、アフリカのガーナで国際機関や地元の政府、さらに大学などと協力して「KOKO Plus」を開発し普及する活動をやっています。現地の離乳食である“koko”※1にこれを混ぜることで栄養不足に悩む乳幼児の栄養改善を図っています。今は社会貢献（ＣＳＲ）活動としてやっていますが、軌道に乗れば味の素にとっても経済利益が生まれるようになります。このように、従来は社会価値だけが求められてきたＣＳＲ活動を通じて経済価値を生み出していこうというのがＣＳＶ※2（共通価値の創造）の概念で、今後企業が目指していく方向になっていくと考えています。企業は社会価値と経済価値を両立させながらサステナブルに社会に貢献していくべきだと考えています。

右：2008 年のヒューマニタリアン賞受賞式にて、右から潘基文（パン・ギムン）国連事務総長（当時）と榊原定征経団連会長（当時東レ社長）
左：受賞パーティにてパン国連事務総長（当時）と握手をする村上氏　（写真はどちらも村上氏提供）

Q６・日本の国際協力における強みは何だとお考えですか。

東レや味の素のような「ものづくり企業」は、やはり「ものづくり」を通じて水不足、食糧不足、環境問題などの社会問題の解決に貢献することだと思います。ただ一企業の力だけでは限界があるので、官民学が一体になって活動していく必要があります。こうしたチームワークで物事を進めるのは日本の得意分野だと思います。官民学が連携したチームワークは、日本の国際協力における強みだということができるでしょう。

Q７・現在上智大学の客員教授としても活躍されていますが、ご自身が授業を展開していく中でグローバル人材を育成するにあたって学生に強調していることはなんですか。

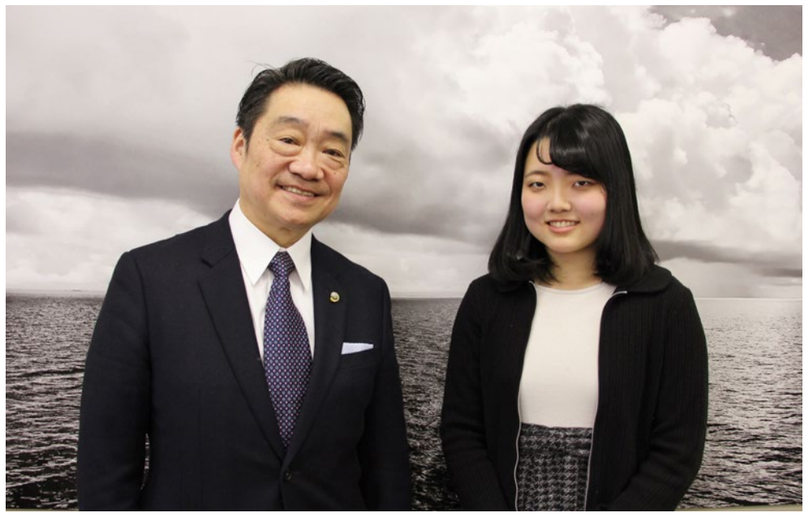
上智大学では２つの授業を担当しています。１つ目は一年生向けの授業です。企業から講師を招き課題を与えてもらい、学生が企業の社員になりきりその課題を解決するためにディスカッションをし、発表をするという形式です。最終的にはコンペティションをするのでみんな意欲的に取り組んでくれています。２つ目は三年生向けの授業です。「ものづくり」企業の生い立ちやＤＮＡ、受け継がれている技術や新製品開発、グローバル化への取り組みなどを学んだうえで、今直面している問題やそれをどのように解決しようとしているのかを、できるだけ具体的に解説します。授業後にアンケートを取ると、90％の学生が「ものづくり」に対する見方が変わったと回答します。残された学生生活の中で、社会に出たときのために何をすべきかに気づいてもらえるような授業を心がけています。私自身会社を退職したら自分の40年間の東レでの経験を若い人たちにも伝えて役に立ちたいと思っていたので、上智大学客員教授のお話をいただきとても充実した日々を送っています。

これからの時代、望むと望まざるにかかわらずグローバル化の波を避けて通ることはできないわけですから、それを理解し、そこから「逃げる」のではなく、「受けて立つ」という気持ちになることを強調しています。「逃げるとせっかくの運も逃げていっちゃうよ」と考えると良いと学生にアドバイスしています。「受けて立つ」と決めたら、時間やチャンスに恵まれている学生時代のうちに自分に足りないものを見つけ、目標を持って過ごして欲しいと思います。自分の強みと弱みをしっかりつかみ、強みを伸ばすことと弱みを克服すること、そのための目標を持ったら簡単に諦めて途中で逃げ出さないことが大切です。“Where there is a will, there is a way”というリンカーンの言葉を授業で引用しています。さらに、グローバル人材になるための心がけとして①相手をリスペクトしてその上で自分の考えははっきり言うこと、②fair & reasonable であること、③自分を磨くこと、という3点をアドバイスしています。

Q８・ＡＰＩＣは太平洋やカリブ地域における支援事業に加え、留学生の支援事業など若者の育成にも力を入れています。グローバル化や多様化が重視される時代において若者に期待していることをお聞かせください。

次世代を担う皆さんには無限の可能性があります。これからの人生には様々な出会いが待っていますし、その中には運命的な出会いも必ずありま す。今の時点ではは っきりした夢が描けていなくても、目標を持ち、あきらめず一生懸命やっていれば必ず道は拓けます。“Fail fast, fail cheap, fail smart”という言葉があります。若いうちにどんどん失敗をしたらいいと思います。

学生の留学離れが進んでいるという話題もありますが、学生が日本にこもっているのはとても残念なことです。目標を持ってチャレンジしようという精神を持ち、いろいろなことに積極的に取り組んで欲しいです。ＡＰＩＣではインターン制度もあります。インターンをはやく経験すると次の目標が見つけやすくなりますよね。学生時代にＡＰＩＣのような活動に参加するということはグローバル化と多様化の両方を体験できるという意味でとても恵まれていると思います。是非皆さんの人生の次のステップに繋げていってください。



左から：村上洋 APIC 理事、インターン生の山本

※１　発酵したコーンを用いたお粥のこと。
※２　Creating Shared Value の略称。

シリーズ第３回

ミクロネシアの巨石文化

―世界文化遺産ナンマトル遺跡を中心に―

上智大学　客員教授
片岡　修

シャウテレウル王朝の首長たちが眠っていたナントワス島（片岡 2014 撮影 民博所蔵）

ナンマトル遺跡との衝撃的な出会い

ナンマトル遺跡との最初の出会いは１９８４年でした。当時アメリカのオレゴン大学人類学部の大学院生だった私に、アドバイザーのエアーズ教授からナンマトル遺跡の発掘調査に声をかけていただいたのが全ての始まりです。ポーンペイ島出陣に先がけて、大学の共同研究室に調査に参加する学生たちが何度か招集され、教授から遺跡の説明を受けました。遺跡に関する知識を身につけることは言うまでもなく、調査のイメージトレーニングだったのです。

現地入りした翌日、人工島の間に形成された水路をゆっくりボートを進ませながら、左右の人工島を一つ一つ観察しました。遺跡の全体像を把握するためです。ナンマトルと接触した第一印象は、イメージトレーニングで描いていたイメージと、実際の巨石建造物との間の大きなギャップでした。それは何と言っても規模の違いです。１００の人工島で構成されているナンマトルの全体像を把握することは、そう簡単ではありません。シャウテレウル王朝の首長のお墓が築かれたナントワス島が見えたときは、あれほど賑やかだった隊員たちは、その壮大さに凍りついてしまいました。32年後に目前の遺跡がユネスコの世界文化遺産に登録されることを、誰が想像していたでしょう。

広大なミクロネシアの中央に位置するポーンペイ島に、いつ、誰が、何の目的で、どんな方法でナンマトルを建設したのでしょう。訪問者が抱くおきまりの疑問です。筏に乗せて石を運搬したという現実的な話がある一方、呪術師がマジックを使って空中を飛ばし積み上げたというエピソードが口頭伝承に登場します。巨岩を含む膨大な量の柱状玄武岩を積み上げた遺跡を目の当たりにすると、マジック説どころか根拠のないムー大陸説や宇宙人説などが飛び出すのは、無理からぬことかも知れません。専門家たちはさまざまな研究と方法を駆使しながら答えを見つけ出そうとしていますが、解決すべき問題と課題はまだまだ山積しています。

今回は、強烈なインパクトの洗礼を受け、35年も付き合うことになったナンマトル遺跡の一端を紹介させていただきます。

ナンマトルと口頭伝承

スペインやドイツやイギリスなど西欧諸国が接触する以前の太平洋の島々は、無文字の社会でした。そのため、神話や歴史や文化など多岐にわたる事柄が、口頭伝承として世代を越えて継承されてきました。遺跡に残された建物跡や墓跡や出土遺物から過去の文化や歴史を理解する上で、信憑性の検討が必要かも知れませんが、口頭伝承は重要な参考資料の一つになっています。

伝承はポーンペイの歴史を、「人々の世」、「シャウテレウル王の世」、「ナーンマルキの世」、「外国人の世」の四つの時代に区分しています（Hadley 2014）。一方、考古学は炭素年代と遺構や遺物の分析の結果と伝承を関連づけ、植民・適応期（紀元前５００～紀元１年）、ペインアイス期（紀元１～１０００年）、ナンマトル期（紀元１０００～１５００年）、イショケレケル期（紀元１５００～１８２６年）、初期接触期（紀元１８２６～１８８５年）、歴史期（紀元１８８５～現在）の６期に時代を区分しています（Ayres 1990 に基づき長岡ほか 2017 が作成）。考古学による年表は細分化されていますが、伝承による時代区分に呼応していることがわかります。

ナンマトルに関係する「シャウテレウル王の世（ナンマトル期）」と「ナーンマルキの世（イショケレケル期）」の伝承について、少しみてみましょう。語り部や歴史家や地域（Hambruch 1936, Hadley 2014）によって、多少エピソードに違いがあります。たとえば、ポーンペイ島誕生の創造神話には13の異なるバージョンが存在しているそうです（Fischer et al. 1977）。複数の伝承を整理し分析したマウリシオ博士（Mauricio 1983）は、つぎのような共通内容をあげています。

（1）ヤップと推定される島から渡来したオロシーパとオロショーパという兄弟がナンマトルを建設。（2）２人は神として崇められたウツボにカメの内蔵をお供えする宗教儀式のための適地を捜索。最初はポーンペイ島北端のショケースロックの麓で祭壇の建設を試みるが、強い風と波の影響により断念。その後ネッチ地区とウ地区の順に南下しながら東海岸でも試みるもやはり失敗に終わり、最終的に現在のナンマトルの場所に決定。（3）ナンマトルは２人の兄弟が生存中に完成。（4）少なくても建設の初期段階には全島民が協力。ちなみに、オロシーパの死後、オロショーパがシャウテレウル王朝の初代首長に就任し、少なくても12代続いたそうです。また、ナンマトルを基盤にポーンペイ全島を支配した屈強なシャウテレウル王朝の時代は、東方から３３３人の従者と共にやってきたイショケレケルという若者によって幕が下ろされます（Hadley 2014）。この若者は、現代の伝統首長ナーンマルキの系譜上の初代と言われています。

伝承にみる人工島のいろいろ

広大なナンマトルは、中央を境に北東部の上マトルと南西部の下マトルに分かれ（図１）、各人工島の名称や機能や用途に関する伝承が継承されてきました（Hambruch 1936, Hadley 2014, Jencks 1970）。大きくは、上マトルは司祭者の居住と葬送儀礼の地区、下マトルは王族の居住と儀式の地区として特徴づけられています。いくつか代表的な人工島を概観してみましょう。

上マトルでは、シャウテレウル王朝の首長たちとナーンマルキたちが埋葬されたナントワス島（図１：１１３、写真１）をおいて、ナンマトルを語ることはできません。ナントワスという言葉には、首長の「口の中」という意味があるそうです。ナントワスではそこに眠る偉大なる魂の鎮魂だけでなく、戦争が起こったときなどには支援の祈りの儀式が行われたようです。ナントワス島の入り口の階段を上ったところに、儀式に使われたシャカオ（カヴァ酒）の石が置かれています。二重の周壁を通り抜け中庭に入ると、ぽっかり

図１　ナンマトル遺跡平面図（原図：Nan Madol nomination dossier 2015）

左下：写真１　ナントワス島の入り口周辺のようす（片岡 2014 撮影 民博所蔵）
右下：写真２　首長たちが埋葬された中央石室（片岡 2014 撮影 民博所蔵）

口を開けた大きな中央石室があります（写真2）。シャウテレウル王朝の首長たちとその後のナーンマルキが埋葬されたお墓です。また、内外二つの周壁の間に築かれた南北のお墓では、下級の司祭者たちが偉大なる精霊とそこに眠る聖なる祖先霊に祈りを捧げたと伝えられています。外周壁東側の内側ではあらゆる行事について協議と検討が行われ、「栄誉ある王朝会議」と呼ばれていたそうです。

次に、ナンマトルで唯一チェムエン島麓の土の上に築かれたペインキチェル（図1：55）をみてみましょう。そこには3基のお墓が築かれています。ナンマトル創建者のオロシーパとオロショーパ兄弟と、イショケレケルとその後の数世代のナーンマルキが埋葬されたと伝えられています。ただし、イショケレケルについては、ペイカップ島（図1：39）の池に映し出された自分の老いた姿を憂いて自害し、密かに海に葬られたというエピソードも伝えられています。

ナンムォルーシェイ（写真3、図1：119）は、ナーカップ湾の荒波からナントワス島を守る防御壁のような構造をしています。巨岩を積み上げた二重周壁の通り道は迷路のようになっており、ナンマトルに入ることを容易には許してくれません。ここは、訪問者が勇気を証明するために飛び込みを行う場所でもあり、カニムェイソと呼ばれる海底都市への入り口でもあると言われています。1対のシャークがその入り口を守っているそうです。

写真3　ナンムォルーシェイ防波堤
（片岡 2005 撮影　民博所蔵）

他には、司祭者とシャウテレウル王朝後の首長ナーンマルキの居住地だったウシェンタウ島（図1：104）、首長たちとナンマトルの住人のためにココナッツ・オイルを製造したペインエリン島（図1：101）、身分の高い司祭者が埋葬されたカリアン島（図1：122）、病の治療を行ったレメンカウ島（図1：129）など各人工島に伝承が伝えられてきました（Hadley 2014）。

一方、下マトルで重要な人工島の一つのパーンケティラ島（図1：33）は、全島を治めた首長たちの居住地で宗教と政治のセンターであったと言われています。人工島に残る19×37mの大型建造物は神殿跡と考えられており、シャウテレウル王の王宮など伝承に登場する複数の建造物が築かれています。また、パーンケティラ島に隣接する約110m四方の巨大なペイカップ島は、水路を挟んだ向かいのイテート島（図1：43）で年1度開催される偉大なる精霊への祈りの儀式のために、身分の高い司祭者らが一堂に会する場所でした。祭祀に関係する建物跡が残っています。イテート島で繰り広げられる王朝の重要な儀式は、島の下に住む神格化されたウツボへの祈りの儀式です。島の南角に長径18mで高さが2・63mのマウンドがあります。石蒸し焼き料理を行った調理場で、カメを料理し腸を取り出しあと胃を綺麗にしてウツボに献げられたと伝えられています。アセンズ博士（Athens 2007）は、頂上から1.1m下に2本並べて置かれた長さ44・7cmもある非実用的な大型のシャコガイ製の斧を発見しています。ここで儀式が行われた可能性があります。石積みの周壁に囲まれた祭祀場内には、北側に神聖なウツボの穴、中央に築かれた建物の南側にはイショケレケルがシャウテレウル王朝を打倒した時に使ったと伝えられている333個の投石が残されています。

写真4　ナントワス島の周壁の石積み
（片岡 2008 撮影　民博所蔵）

他には、イショケレケル一行が滞在しシャウテレウル王のもてなしを受けたケレプェル島（図1：32）や、突き出した巨岩の前を無事通過できれば、勇敢でたくましい子供を出産できるという妊婦石があるパーンウィ島（図1：9）などさまざまな興味深い伝承が伝わっています。

建設からみたナンマトル

エアーズ教授（1990）は、ナンマトル遺跡全体でおよそ50〜75万tで体積が30万㎥の玄武岩が使用されたと推算しています。ハンブルク（1936）は、ナンマトル遺跡の総面積を24・6万㎡と推算しており、人工島の高さを平均1.5mとすると体積は36・9万㎥となります。膨大な量のサンゴと埋土が使用されたことは、言うまでもないでしょう。ナンマトルの海側に、ポーンビカラップと呼ばれる広大な砂地が広がっています。この地に繁殖していた大量のサンゴがナンマトル建設に利用されたために、不毛な砂地へと環境が変化したといわれています。

それでは、ナンマトルの代名詞のようになっているナントワス島をみてみましょう。規模は60×70mで高さ2mの方形の人工島の上に、高さ6mに柱状玄武岩を井桁状に積み上げた二重の周壁に囲まれ（写真4）、中央には半地下式、南北には竪穴式の石室を持つ計3基のお墓が築造されています。現地政府の歴史保存局によると、62，500本の柱状玄武岩が使われているそうです。その数字をもとに、建設に要する労働量を試算する数教授の資料を参考に、自然摂理の断面六角形の1辺を20cm、長さ1.5mを基準に試算してみました。六角柱を求める方式で体積を計算すると約0・16㎥となり、62，500本の玄武岩には21m四方の岩盤が必要となります。ナンマトル建設に使用された玄武岩は、伝承や科学的な石材の分析から西部のプイセーンマレックの岩山（写真5）や北部のショケースロックなどポーンペイ島内の数カ所の採石場が特定されています。最も遠い採石場は、ナンマトルまでラグーン経由で30kmあります。

写真5　柱状玄武岩が採掘されたプイセーン
マレックの岩山（片岡 1997 撮影 民博所蔵）

体積に比重をかけて計算してみると、1本の重量は467・1kgになり、1人の運搬重量を30kgとすると16人必要となります。中央石室の天井石には12本の長大な柱状玄武岩が使われており、最長は5.3mを測り1.6tあります。この1本だけで、計算上53人の運び手が必要となります。1本16人で運搬したとすると、62，500本を運ぶためには延べ1，000，000人が必要となります。仮に1日に筏を250隻導入したとしても、4，000人が従事して250日かかる計算になります。1800年代に西欧人が残した記録から、シャウテレウル王朝時代のポーンペイ島全体の推定人口を約25，000人とする考え方があります。その人口にとって推定作業者数と、筏あるいは筏を牽引するカヌーの数が現実的かどうかわかりません。しかも、これらの数字には南東コーナーのような60tにおよぶ巨岩（写真6）の運搬や、人工島や周壁やお墓の建設要員は含まれていないので、膨大な労働量が必要であったことは言うまでもありません。ナントワス島全体への負荷は約29，200tで、1㎡当たり7tの荷重がかかることになります。周壁の一部に崩落が見られますが、これほどの負荷にもかかわらず、およそ820年の間立ち続けてきた土木と建築技術には驚かされます。

最近、人工島の建設と首長が埋葬された中央石室の建設の間に時間差があるという、興味深い研究成果が発表されました。炭素年代測定によって、人工島と二重周壁は紀元1172〜1186年に、石室は紀元1197〜1209年に建設されたことが明らかになりました。つまり、少なくても最初に埋葬された首長は、生前に墓を建設していた可能性があるのです（MaCoy et al. 2016）。いずれにしても、ナンマトルの建設は、宗教に裏付けされた首長による島民の統率力と政治力が大きく反映したに違いありません。

次回は、いよいよ最終回です。ナンマトル遺跡のユネスコ世界文化遺産登録の経緯や課題や進行中の活動についてお話ししましょう。

写真6　ナントワス島南東コーナーの巨岩（片岡 2011 撮影 民博所蔵）

参考文献

- Athens, J. S., 2007. The Rise of the Saudeleur: Dating the Nan Madol Chiefdom, Pohnpei. In Atholl Anderson, K. Green, and Foss Leach (eds.), *Vastly Indegenious: The Archaeology of Pacific Material Culture*. In Honor of Janet M. Davidson. Dunedin: Otago University Press, pp.191-208.
- Ayres, W. S. 1990. Pohnpei's position in Eastern Micronesian Prehistory. *Micronesica*, Supplement 2:187-212.
- Fischer, J. L., S. Riesenberg, and M. Whiting, eds., 1977. *Annotations to the Book of Luelen*. Pacific History Series no. 9. Honolulu: University Press of Hawaii.
- Hadley, Masao, 2014. *Nan Madol: Spaces on the Reef of Heaven* translated by Paul M. Ehrlich. Ehrlich Communications. (Kindle Edition)
- Hambruch, P., 1936. *Ponape. Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910* ed. by Thilenius. Hamburg: Friederichsen. DeGruyter & Co. m.b.H.
- Inscription on the World Heritage List, 2015. *NAN MADOL: CEREMONIAL CENTER OF EASTERN MICRONESIA*.
- Jencks, C., 1970. *Nan Madol. Pohnpei: Ponape*. Economic Development Office.
- Mauricio, R., 1983. Nan Madol Oral Traditions. In Ayres, W.S., Haun, A.E. and Mauricio, R. *Nan Madol Archaeology: 1981 Survey and Excavations*. MS on file, Historic Preservation Office, Pohnpei State, Federated States of Micronesia, pp. 205-238.
- McCoy, M. D., H. A. Alderson, R. Hemi, H. Cheng, and R. L. Edwards, 2016. Earliest Direct Evidence of Monument Building at the Archaeological Site of Nan Madol (Pohnpei, Micronesia) Identified Using ^{230}Th/U Coral Dating and Geochemical Sourcing of Megalithic Architectural Stone *Quaternary Research*, http://dx.doi.org/10.1016/j.yqres.2016.08.002.
- 長岡拓也・石村智・片岡修 , 2017.「ミクロネシアの巨石遺跡 ナンマトルの研究の現状と世界遺産への登録について」『古代文化』68(4): 564-570.

APIC 早朝国際情勢講演会

【第 343 回早朝講演会にて】
外務事務次官　杉山 晋輔 氏

毎月 1 回開催される **APIC 早朝国際情勢講演会**では、外務省幹部、在外大使などを講師として、時局の外交課題や激動する国際情勢などについて講演が行われます。

現職の外務省局長、一時帰国中や退官直後の大使から、いま実際に進行中の国際情勢のテーマについて質の高い話を聞くことができる機会として、参加者からの評価は極めて高いものがあります。なお、APIC 維持会員の皆様には自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っております。詳細については、裏表紙に記載している APIC 事務局の連絡先にご照会ください。

最近の講師とテーマ

■第 342 回早朝国際情勢講演会
日時：2017 年 12 月 21 日（木）
講師：外務省北米局参事官　船越 健裕 氏
演題：「トランプ米国大統領下の米国情勢と日米関係
－回顧と展望－」

■第 343 回早朝国際情勢講演会
日時：2018 年 1 月 18 日（木）
講師：外務事務次官　杉山 晋輔 氏
演題：「2018 年の日本外交 －課題と展望－」

■第 344 回早朝国際情勢講演会
日時：2018 年 2 月 15 日（木）
講師：外務省経済局審議官　飯島 俊郎 氏
演題：「日本の経済外交の現状と展望」

■第 345 回早朝国際情勢講演会
日時：2018 年 3 月 15 日（木）
講師：前駐フィリピン共和国特命全権大使　石川 和秀 氏
演題：「最近のフィリピン情勢と日比関係」

■第 346 回早朝国際情勢講演会
日時：2018 年 4 月 19 日（木）
講師：前駐サウジアラビア王国特命全権大使　奥田 紀宏 氏
演題：「サウジアラビアの改革と日本」

■第 347 回早朝国際情勢講演会
日時：2018 年 5 月 17 日（木）
講師：外務省地球規模課題審議官（大使）　鈴木 秀生 氏
演題：「気候変動と SDGs に関する日本の取組」

■第 348 回早朝国際情勢講演会
日時：2017 年 6 月 21 日（木）
講師：外務審議官（経済）　山﨑 和之 氏
演題：「本年のサミット並びに日本の課題」

※講演時の役職を記載しています。

第10回APIC国際協力懇話会

２０１８年１月30日に、第10回ＡＰＩＣ国際協力懇話会を開催いたしました。講師に木寺昌人駐フランス共和国特命全権大使を迎え、東京倶楽部において講演が行われました。

木寺大使は、昨年２月の第９回ＡＰＩＣ国際協力懇話会にも講師としてお越しいただきましたが、今回は「フランスから見た２０１８年の世界」と題して講演をお願いしました。マクロン大統領の就任後の動向やフランスの近況分析を踏まえて、英国のＥＵ脱退をはじめとした欧州各国との関係や今後の国際社会情勢について、写真資料の説明を交えながら分かりやすくお話しいただきました。また、パリを中心に行われる日本博「ジャポニスム２０１８」の関連で音楽や芸術に関する話題にも触れ、終始和やかな雰囲気の講演会でした。

略歴

1976 年	東京大学法学部卒業
同年	外務省入省
1997 年	在タイ日本国大使館 参事官
2000 年	在タイ日本国大使館 公使
同年	大臣官房会計課長
2001 年	在フランス日本国大使館 公使
2002 年	在ジュネーヴ国際機関日本政府代表部 公使
2005 年	大臣官房審議官兼経済局
2006 年	大臣官房審議官兼総合外交政策局 大使
2008 年	中東アフリカ局アフリカ審議官
同年	国際協力局長
2010 年	大臣官房長
2012 年	内閣官房副長官補
同年	駐中華人民共和国 特命全権大使
2016 年	駐フランス共和国 特命全権大使

2018 年 6 月 21 日に開催された理事会において、平成 30 年度（2018 年 7 月 1 日から 2019 年 6 月 30 日まで）の【事業計画】及び【収支予算】が承認されました。詳細は下記の通りです。

平成 30 年度事業計画

◆ 太平洋島嶼国開発協力事業

太平洋島嶼国の信頼関係を構築し、友好関係の一層の推進を図るため、「太平洋島嶼国開発協力基金」を活用して、太平洋島嶼国の環境、エネルギー及び観光の分野における開発協力事業として、外務省アジア大洋州局大洋州課、太平洋諸島フォーラム（PIF）等と協議も行い、次のプロジェクトを実施する。

① 太平洋諸国・大学生招待計画
② 太平洋諸国・記者招待計画
③ 太平洋諸国・リーダー招待計画
④ 太平洋諸国・環境セミナー
⑤ 上智大学ミクロネシア・エクスポージャーツアー支援
⑥ ミクロネシア短期大学・学生招待計画（麗澤大学・上智短大）
⑦ APIC･MCT 協力事業（大学院生支援）
⑧ APIC･MCT 協力事業（プラスチック・リサイクル・プロジェクト）
⑨ 上智大学地球環境学研究科との環境に関するシンポジウム開催
⑩ ナン・マトル遺跡保存支援事業
⑪ ミクロネシア写真展
⑫ 海洋温度差発電プロジェクト
⑬ ミクロネシア・チューク州観光開発支援事業

◆ 日・カリブ友好協力事業

カリブ諸国の信頼関係を構築し、友好関係の一層の推進を図るため、「日・カリブ協力友好基金」を活用して、カリブ諸国の環境、エネルギー及び観光の分野における開発協力事業として、外務省中南米局カリブ室、カリブ共同体（カリコム）事務局等とも協議の上、次のプロジェクトを実施する。

① 西インド諸島大学・大学生招待計画（太平洋と同時実施）
② カリブ諸国・記者招待計画（太平洋同時実施）
③ カリブ諸国・リーダー招待計画
④ カリブ諸国・環境セミナー
⑤ 西インド諸島大学・学長招待計画
⑥ 上智大学地球環境学研究科との環境に関するシンポジウム開催

◆ 国際協力に関する講演会事業

本件早朝講演会は、外務省幹部、在外大使による時局の日本の外交課題や激動する国際情勢などについて質の高い内容の話題を提供する講演会として、参加者から評価が高い。本件講演会は APIC が諸活動を展開する上で欠かせない事業であり、今後とも会員の期待に沿えるように毎月一回（8 月を除く）企画して行く。また、同様の外交課題・国際情勢等をテーマに小規模の懇話会（東京及び地方）を実施する。

① APIC 早朝国際情勢講演会
② 国際協力懇話会

◆ 留学生奨学金事業

若い世代の育成と人的交流の一環として、ミクロネシア連邦にあるザビエル高校から毎年、上智大学への留学生を迎えることとし、生活費等の支給を含め経済的に支援を行う。

ザビエル高校（ミクロネシア連邦チューク州）には、ミクロネシア連邦のみならず、パラオ、マーシャル諸島の最優秀の生徒が入学する。卒業生には、ミクロネシア連邦モリ前大統領を始めとしてそれぞれの国のリーダーが輩出している。このような事情もあり、APIC が上智大学と協力して開始した本件「留学生制度」については、3 カ国の首脳の間で極めて高い評価が与えられている。

本件留学生協定に基づき、2014 年 9 月から第一期生として 1 名、2015 年 9 月から 1 名、2016 年 9 月から 1 名、2017 年 9 月から 2 名が上智大学に入学している。今秋も 2 名が入学する予定である。

APIC としては今後募金活動を積極化するとともに、留学生に対する生活費等の支給を含め留学の支援を行っていく。（なお、APIC は旅費、生活費を負担、上智大学は学費、寮費を負担。）

（詳しくは、APIC ホームページをご覧ください。）

平成 30 年度収支予算

（単位：円）

収入の部		支出の部	
	平成29年度予算		平成29年度予算
1. 収入	**72,353,000**	**1. 事業活動支出**	**106,661,900**
a. 基本財産運用収益	3,000	a. 太平洋島嶼国開発協力事業	37,100,000
b. 特定資産運用収益	48,000,000	b. 日･カリブ友好協力事業	35,700,000
（太平洋基金･カリブ基金）		c. 早朝講演会事業	6,100,000
c. 維持会員会費	19,000,000	d. 留学生奨学金事業	4,800,000
d. 受取寄付金	1,800,000	e. 事業間接費	22,961,900
e. 雑収入	3,550,000		
		2. 管理費支出	**21,504,100**
		a. 役員報酬･給与手当	7,860,000
		b. その他の管理費	13,644,100
当期収入合計	**72,353,000**	**当期支出合計**	**128,166,000**
前期繰越	**463,700,000**	**次期繰越**	**407,887,000**
合計	**536,053,000**	**合計**	**536,053,000**

APIC 役員名簿

【役員】

理事長	**佐藤　嘉恭**	（最終官職：駐中華人民共和国特命全権大使）
常務理事	**佐藤　昭治**	（最終官職：駐ミクロネシア日本国特命全権大使（兼パラオ・マーシャル諸島））
理　事	**荒木　恵**	一般財団法人国際協力推進協会　事務局長（最終官職：財務省 国際局局付派遣職員（アジア開発銀行））
理　事	**坂本　吉弘**	一般財団法人安全保障貿易情報センター　理事長（最終官職：通商産業省 通商産業審議官）
理　事	**炭谷　茂**	社会福祉法人恩賜財団済生会　理事長（最終官職：環境省 事務次官）
理　事	**芳賀　達也**	一般社団法人太平洋協会　事務局長
理　事	**舟木　いさ子**	ヤクモ株式会社　代表取締役会長
理　事	**村上　洋**	味の素株式会社　社外監査役
理　事	**山本　達也**	エーオンジャパン株式会社　代表取締役社長
監　事	**金成　憲道**	ドイツ証券株式会社　取締役会長
監　事	**兵藤　廣治**	兵藤税理士事務所　税理士（最終官職：衆議院 大蔵委員会調査室長）

【評議員】

評議員	**石堂　一成**	東京コンサルティング株式会社　代表取締役社長
評議員	**渋澤　健**	コモンズ投信株式会社　取締役会長
評議員	**島内　憲**	元駐ブラジル連邦共和国特命全権大使
評議員	**廣野　良吉**	成蹊大学　名誉教授
評議員	**本多　義人**	東神インターナショナル株式会社　名誉会長

ザビエル留学生奨学金

◆ ご寄附のお願い ◆

対　象　**ザビエル高校卒業生　毎年1～2名**
留学先　**上智大学国際教養学部、理工学部など**
奨学金　**卒業までの4年間の奨学金を授与**

留学生を中・長期的に受け入れるためには、それにかかわる渡航費、入学金、授業料、生活費等とかなりの額にのぼることが見込まれます。皆さまからのご協力をお願い申し上げます。

銀行振込先

三菱東京 UFJ 銀行　本店（店番 001）　普通口座 1660339
口座名　一般財団法人　国際協力推進協会　奨学金募金口
カナ名　ザイ）コクサイ　キヨウリヨク　スイシン　キヨウカイ
※振込手数料はご負担をお願いしております。

皆様のご支援、ありがとうございました。

ザビエル留学プログラムは、上智大学の留学生基金の他、皆様のＡＰＩＣへのご寄附により、２０１８年７月現在、総額約８，４５０万円お預かりいたしました。皆様のおかげで、留学生は上智大学で充実した生活を送っています。誠に、ありがとうございます。

御礼申し上げますとともに、本留学生制度に更なるご支援をお願いいたします。

APIC では維持会員（法人会員・個人会員）を募集しております。

APIC 維持会員の皆様には毎月開催される外務省高官、大使による **APIC 早朝国際情勢講演会**を自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っています。詳細につきましては、APIC 事務局にご照会ください。

場所　ホテルオークラ東京　会議場

時間　午前 8:30 ～ 10:00（朝食付き）

お問い合わせ

TEL：03-5577-2900
FAX：03-5577-2901
E-mail：apicinfo@apic.or.jp

■発行人
佐藤　嘉恭

■発行日
平成 30 年 7 月 1 日

■発行所
一般財団法人 国際協力推進協会
〒 101-0054
東京都千代田区神田錦町 3-15-6
名鉄不動産竹橋ビル 7 階
TEL : 03-5577-2900 / FAX : 03-5577-2901
MAIL : apicinfo@apic.or.jp

■編集長
芳賀　達也　（理事）

■副編集長
加藤　奈美

■編集
斉藤　拓馬

【APIC インターン生】
喜多　萌子　（津田塾大学大学院）
金原　弘恭　（上智大学）
山本明日香　（上智大学）